
緋弾のアリア～神殺し伝説～

珍獸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～神殺し伝説～

【Zコード】

N1430Y

【作者名】

珍獸

【あらすじ】

世界でもトップクラスの特殊部隊、米軍・第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊、通称デルタフォースに14歳で入隊した米軍少佐の毒島金助。

そんな金助は、更に諜報を得意とするランクの凄腕武偵でもあった。

軍の上司でもある父に勧められて4月から従兄の住む日本の武偵高に転校することになった金助。

だが、日本で出会った仮面を付けた謎の男に渡された刀『神殺し』

を手にした」と、色金を巡る争いに巻き込まれていく・・・・・。

プロローグ～再会～（前書き）

先に言つておきますが、私には文才といつものはありません！！！
ひどいことになつてるかもしれません、温かい目でで読んでいた
だけたら幸いです。

プロローグ～再会～

武偵。それは日々凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格で、武装探偵の略称である。

武偵は武装を許可されて、武偵法の許す範囲内においてありとあらゆる仕事を請け負つ、いわゆる便利屋である。

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島、通称学園島。

元は空港滑走路として使われる予定だったこの島に、武偵の教育機関である東京武偵高は存在する。

その武偵高の施設の周りを俺は歩いていた。

若干短めの黒髪に、それなりに整った顔立ち、185センチの長身、

武偵高の制服を着ている。

俺——毒島ぶすじま金助きんすけは、教務科マスターで転校の最終手続きを終え、敷地内を

散歩していた。

自慢だが、俺は米陸軍特殊部隊のデルタフォースの最年少隊員であり、階級は少佐だ。

なぜそんな俺が東京武偵高にいるのかというと、父親であり、尚且つデルタフォースの司令官である毒島ぶすじま金正かねただに「日本の優秀な武偵の中での、自分を磨くように」という指示を受けたのと、従兄がこの学校にいるからだ。

俺は周りの施設を見回した。

『アメリカの基地程では無いが、なかなかの施設が揃つてゐるな。

俺は更に歩を進め、気がつけば第2グラウンドの横に来ていた。

『ここがグラウンドか。広さはまあまあかな?』

そう言いながら歩きながらグラウンドの広さを確認していると、グラウンドの入口からかなりのスピードで何かが入っていくのが見えた。

『自転車・・・なんであんなに速度だしてるんだ？駐輪場はあっちじゃなかつたはずだし・・・』

自転車の行き先を考えていると、後ろから少女がパラグライダーで低空飛行しながら追いかけて行つた。

『・・・新手の鬼こつこかな？』

そう呑気な事を考えていたらパラグライダーの少女が自転車の先に回り込み、掴まるところに足を引っ掛け逆さづりになり、自転車に乗つた奴にぶつかつて自転車に乗つっていた奴はパラグライダーの少女に抱きつく形で自転車から持ち上げられた。

その後、乗り主をなくした自転車は徐々に速度を落として――爆発した。

パラグライダーと自転車の二人は、今のは爆風で体育倉庫の中に転がつて行つた。

『マジかよ・・・！』

訓練で何度も使用したから分かるが、爆発の音・威力・爆発の仕方等の情報から察するに今の爆発はC4爆弾が使われていたということが俺には分かった。

しかも、自動車くらいなら余裕で吹き飛ばせるほどの量を。

『とにかく体育倉庫に向つか』

ひとつ飛びでフェンスを乗り越えて、体育倉庫に向かつて走り出した。

だが、それは背後からの銃撃に止められた。

弾が跳んできた方を見ると、そこにはスピーカーとイスラエルのIMI社の傑作銃のUZIが取り付けられた、セグウェイが10台止まつていた。

『なんでセグウェイなんかにUZIが付いてるんだよ！』

俺は近くの太い木の陰に隠れた。

セグウェイは、3台だけ残して残りの7台は体育倉庫の方に向かつて行つた。

『一体どうなつてやがるんだよ・・・・!』

キレ気味の声でそう言いながら、右脇のショルダー・ホルスターからベレッタを抜いた。

セグウェイとの距離は、およそ8m。

『喰らえ!』

少しだけ木陰から身を出して、セグウェイに向かつて残弾が無くなるまで発砲した。

あまり良い射撃体勢ではなかつたが、綺麗に全弾命中し、2台は壊れていた。

『一つ残つたか・・・』

ベレッタのマガジンを代えて、俺はまた木から身を出して最後のセグウェイに数発発砲した。

撃つた弾の内一発がJINに当たり、セグウェイは行動不能になつた。

『無駄に手間掛けさせやがつて・・・』

セグウェイの破壊を確認し、直ぐに体育倉庫に向かつた。ちょうどその時、体育倉庫の方から少年が一人出てきた。

『なつ・・・・!』

その少年の顔を見て、俺は目を丸くしたまま固まつた。

その少年のことを、俺は知つていた。

『キンジ・・・・』

その少年——遠山 キンジ(とおやま きんじ)は、俺の従兄だからだ

プロローグ～再会～（後書き）

中途半端な終わり方をしてしまいましたww
とりあえず次はもう少ししっかりと書きたいと思います。

第1話～遠山キンジと神崎・H・アリア～（前書き）

1日1話ペースで書いりつつ思つてましたが、予想以上にキツイです

第1話～遠山キンジと神崎・H・アリア～

それなりに離れていたので、キンジは俺に気づくこともなく去つていった。

『つて事は自転車に乗つてたのはキンジだつたのか・・・。だが何故パラグライダーの子に追われてたんだ?』

追いかけようか考えたが、そこであることを思い出した

『そうだ!さつきのセグウェイ!』

俺は今やつをキンジが出てきた体育倉庫へと走つた。

この時に体育倉庫に行つてしまつたことを、後に後悔することになるとは知らずに。

体育倉庫のすぐ近くまで来た俺は、言葉を失つた。

体育倉庫の前には、セグウェイに取り付けられていたHNEが大破――恐らく銃口に弾丸を入れて壊した――していた。

『これは・・・キンジがやつたのか・・・?それとも・・・あいつか?』

「アイツ!今度会つたら絶対風穴開けてやる・・・!」

俺の目線の先には、小太刀を振り回しながらワ キャー叫んでいる少女がいた。

小学生くらいの身長に、武僧高のセーラー服を着ている。

特徴的なのは、膝のあたりまである長いピンクのツインテールだ。しかし・・・・。

『何というアニメ声!・・・つて今はそんなこと言つてる場合じゃねえな。

エクスキュー・・・じゃなくてすいません』

英語を話しそうになりながらも、転校初日から悪い印象を持たれまいと丁寧な少女に声をかけた。

「ひやうつー！」

いきなり話しかけられてびっくりしたのか、少女はバツと振り返つて俺を見た。

『驚かせちゃった？ それはスイマセン。ところでいきなりだけど「見つけたー！」・・・へ？』

話している途中でいきなり指を指されて、俺は間の抜けた声を出した。

『さつきはよくもやつてくれたわねこの強獵男！ー！』

少女は独特な地団駄を踏みながら怒鳴りつけてくる。

『強獵？ 何のことですか？』

『とぼけてるんじゃないわよ！ー！』

少女はそう言いつと、物凄いスピードで小太刀で斬りかかってきた。

『ぬおつー！』

全力で横に跳んで、ギリギリで小太刀をかわす。

『ええいちょこまかと！ー！』

少女は直ぐに方向転換して、再度俺に斬りかかってきた。

流石に連続でよけるのは無理だと判断し、ショルダーホルスターに銃と一緒に付けてあるコンバットナイフを2本取り出し、切り結ぶ。勢いは少女の方が上だが、頭に血が上っていて力にムラがあつたため腕力だけで押し切ることができた。

もはやこの様子では事情を聞くのは不可能に等しい。

俺はこつそり隠し持っていたスタングレネードーーちなみにこれは閃光だけのタイプだーーを後ろ手で準備する。

『てことで三十六計逃げるに如かず！ー！』

少女と俺との間にスタングレネードを投げて、全速力で後ろを向いて走り出した。

少女は、投げられたものがスタングレネードだと直ぐに理解し、腕で目を隠していた。

スタングレネードが爆発し、辺りは一瞬光に包まれた。

俺は少女が動き出す前になんとかその場を離脱し、俺は教務科に向マスター

かつた。

『まさかいきなり襲われるとはな・・・しかも強猥男とか言われたし・・・』

俺は教務科で先生に指示された教室（ちなみに2・Aである）の前で、中で軽く挨拶をしている担任の高天原ゆとり先生を待っていた。

『わざわざ外で一日待たせてから呼ばなくとも、最初つから中に入れてくればいいのにな』

そんな感じで愚痴つてると、教室の中からこんな声が聞こえてきた。『私からの挨拶が終わつたところで、スペシャルゲストの転入生を紹介します

ニユーヨーク武偵高から来た、カッコイイ帰国子女ですよー』

先生、なんで紹介する前からそんなにハードルあげるんですか・・・そんな俺の心の声もつゆ知らず、先生が「それでは入つてきてください」と呼んできた。

まあそれはそれとして置いといて、やはり第一印象は大事だ。キツイ顔になつていなか確認し、俺は教室の扉を開いて中に入った。

瞬間、教室中の女子生徒は「キャー！！」という悲鳴なのが何とかよく分からぬ声を上げた。

良く知り合いに「顔立ちがいい」とか「イケメン」とか言われるが、こんな悲鳴を上げられるほどのものだったとは思わなかつたな。教壇のところまで行き、先生に軽く頭を下げてからチョークを手に取り、黒板に漢字で名前を書いて——ちなみに字はかなり綺麗——皆の方に向き直つた。

クラスの皆をざつと見渡すと、そこにはキンジの姿があつた。

『先生の紹介にあつたとおり、ニユーヨーク武偵高から来た毒島金助です。よろしくおねがいします』

丁寧に自己紹介をし、最後に軽い営業スマイル（？）をした。するとまた女子生徒達が「キャー！！」と声を上げた。

若干引き気味の先生に促されて、キンジの真後ろの空席に座った。

「凄い人気だな、お前。俺は遠山キンジだ。」

座るなり、後ろを向いてキンジが話しかけてきた。
どうやら俺のことを忘れたらしい。

俺は、キンジの顔を笑顔でジーっと見つめる。

「どうした？顔になんか付いてたか？」

キンジは両手で顔を探つた。

もちろん何も付いていない。

『何だ、忘れられちまつてたか
「忘れる？何のことだ？」』

『本当に覚えてないのか・・・まあしょうがないか。最後に会った
のだって5歳くらいだったもんな・・・』

『お前は何を言つてるんだ？』

少し感傷にひたつていた俺に、キンジはせつとほんとんど意味が変
わらない質問を投げつけてきた。

『俺だよ俺。従兄の金助だよ』

『・・・・・！』

キンジは口をあんぐり開いたまま固まつた。

『思い出しててくれたか？キンジ』

『・・・・そうか、金助だったのか』

『積もる話もあるだろうが、それは後でな？』

俺は目でキンジに前を向くよう促した。

キンジは何か言いたそうな顔をしていたが、渋々前に向き直つた。

キンジが前を向くとほぼ同時、教室前方の席の女子生徒が、立ち上
がつた。

自己紹介でもやらせるのかなーと俺は呑気な事を考えていたが、よ
く見ると立ち上がった女子生徒はセツキ一戦交えたあの少女だった。

「死角で見えんかった・・・」

目の前ではキンジが机に突つ伏してた。

体育倉庫で二人に何かあつたということは、キンジのリアクションを見れば一目瞭然だつた。

朝はいきなり襲われて名札——武慎高では、4月に全員が名札を付けるルールがある——を確認し損ねたが、今は見える。

『・・・神崎・H・アリア?』

女子生徒の胸に付いた名札の名前を読み上げる。

その時、神崎は教壇の横からキンジを指をしてこう言つた。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

俺以外のクラスの生徒、絶句。

そして数秒沈黙が続いた後に、クラス中に歓声が起つた。

キンジを見ると、椅子からずり落ちていた。

「よ・・・良かつたなキンジ!なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ!」

先生!オレ、神崎さんと席変わりますよ!』

するとキンジの真右に座っていたツンツン頭の男子生徒が立ち上がるなりキンジの手を振りながら満面の笑みでそう言つた。

てかでかいなコイツ。185センチある俺よりもでかいぞ。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤君、席を代わつてあげて。』

先生がうれしそうにキンジと神崎を交互に見ながら言つた

一旦ここまで流れを整理しよう。

- ・朝、二人は爆弾事件に巻き込まれて、体育倉庫で何らかの接触をし、恐らくキンジが何か神崎を怒らせるようなことをした。

- ・俺のクラスは、キンジと神崎が一緒だつた。

- ・神崎が突然キンジの隣に座りたいと言い、武藤というキンジの友人らしき生徒が何やら勘違いをして、うれしそうにキンジの隣の席を譲つた。

駄目だ、全く状況が掴めない・・・

ふと周りを見ると、金髪の神崎と同レベルの小ささの理子という女

子生徒が「フラグがバツキバキ」だの「熱い恋愛の真っ最中」とかよくわかんないことを言いながら机に突つ伏して落胆しているキンジの机のまわりをよく分からぬステップを踏みながら回っていた。周りの生徒は、なんだかキンジにあらゆる罵声を浴びせていた。

ズガガン!!

そんな若干シユールな光景を眺めていると、突然一連発の銃声が鳴り響いた。

よくわからぬけど、今のやり取りで何故か顔を真っ赤にした神崎が2丁の大型拳銃のガバメント（M1911）をぶつ放したらしい。「れ、恋愛なんて・・・くつだらない！」

チン、チンチンチチン・・・・・

銃から排出された2つの薬きょうが落ちる音が響いた。

良く分からぬ舞を踊っていた理子は、ロボットのような力チカチした動きで自分の席に早急に戻った。

いくら校内での発砲が許可されているとはいっても、このタイミングでいきなり銃をぶつ放されたら俺のような軍人ほど発砲に慣れていなければ、そりやあビビるだろう。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言つヤツには・・・」

これが、神崎・H・アリアの皆に向けた唯一の自己紹介だった。
「風穴あけるわよ！！」

2-Aの教室に、天井に向けて放たれた、乾いた銃声が響いた。

第1話～遠山キンジと神崎・H・アリア～（後書き）

擬音が何気に難しいです

第2話～ランク決めと奴隸宣言～（前書き）

激しい腹痛の中書いたため、文章が変かもしません

第2話～ランク決めと奴隸宣言～

昼休みになるやいなや俺は質問攻めにあつていた。

クラスの連中どころか、噂を聞きつけた他のクラスから来た奴らも交じつて、教室は飽和状態だ。

そんな状況だが、悪い印象を持たれないためにもきちんと質問——一度だけ何故かスリーサイズを聞かれた——に答えるければいけなく、神崎関連で俺のように質問攻めにあいそつになつて逃げた従兄をこの時は恨めしく思った。

「前の学校では専門科は何だったの？あとここではどこに入る予定なの？」

ふと、そんな質問をされた。

やつとまともな質問が出てきたな・・・

『一ノコ一ノク武偵高では諜報科レザックアサルト強襲科アサルトに入るつもりなんだ』

そう回答したところランクのところで歓声が上がり、強襲科以外の生徒からは

「強襲科なんて物騒なところ止めて探偵科インケスターにおいでよー！」

「ランクなのに科を変えるなんてもつたいないよー諜報科にしなよー！」

「いや、車輌科ロジにすれよー！」

「衛生科メディカにするべきよー！」

「情報科だ！」

といつた感じの意見——願望が出てきた。

ここは理由を話すしかないな。

『あー、悪いけど強襲科になるのは決定事項なんだ。俺は武偵であると同時に、米陸軍の特殊部隊デルタフォースに所属していて、そ

「」の司令官でもある父の命令で強襲技術を磨かないといけないんだ。

『俺は強襲科を選ぶ理由をきちんと説明し、その場の争いを収めた。

「――・・・え?」「――

周りの皆が唖然としている中、一人の男子生徒がこう聞いてきた。
「デルタフォースって、あのデルタフォース! 確かデルタフォースの入隊できる最低の階級が2等軍曹だつたよね? ……失礼かもしないけど、毒島君の階級は?」

詳しいものだ、と感心しながら俺は質問にこいつ答えた。

『少佐だよ』

2-A教室に、荒っぽい武僧高ではかなり珍しい長時間の沈黙が流れれた。

放課後、俺は強襲科を担当している蘭豹に呼び出され、廃ビルの前に来ていた。

なんでもランクを決める為にテストをするらしい。
アメリカから来たばっかりでしつかりした武装をそろえられていないので、テンションはかなり低い。

今持つてきているベレッタM92Fだって、軍から支給されたもので元は俺の銃ではない。

それにナイフも急いで購入した安物だ。

唯一の救いは自作して作ったスタングレネードだな。あくまでも自作の域を超えないけど。

自分の装備に肩を落としていると、後ろから声がかけられた。

『蘭豹先生。』

『来たか毒島。キッチンと武装してきたな?』

振り返ると、立っていたのは蘭豹だった。

男物っぽいTシャツとカットジーンズを着ており、背中には2把はあるであろう長刀を背負っていて、何より腰まであるでかくて長いポーテールが特徴的だ。

かなりの美人なのだが、凶暴な性格にバカみたいな怪力の持ち主の為雌ゴリラと呼ばれている——キンジ情報——らしい。

『はい先生。』

無論、嘘だ。

「よし、それじゃテストの詳細を説明するで。お前にやは武装した強襲科のガキ共と一緒にこの廃ビルに入つて、他の奴を相手に捕縛しあつてもらう。以上や。何か質問はあるか?」

「ずいぶん短い説明だなと思いつつ、ありませんと返事をする。

「じゃあ中に入れ。サイレンが鳴つたらスタートや。」

そう言って、蘭豹はビルの横にある小さな建物に入つて行つた。

『さて、がんばりますか。』

俺は廃ビルの戸に手をかけ、開けた。

中はそれなりに広く、遮蔽物は正方形の柱がいくつあるだけだった。

周りの状況を確認していると、サイレンが鳴つた。

俺は、1階に誰もいないことを確認してから2階へ続く階段を登つた。

普通の人は、隠れながら慎重に進むだろう。

だが、俺は違う。

諜報専門の兵士になるために物心がつく前から父にハードな訓練をやらされていて、そのおかげで俺は人の気配を察知する能力が異常に高いのだ。

よつて、俺に対しても生徒の武僧レベルの待ち伏せは意味を成さるのである。

階段を登つている途中で、2階に何人かの隠れている気配を感じた。どうやら他の生徒達は、手を組んで一気に多人数で攻めて終わらせる作戦らしいな。

『だが甘い。』

俺は脇のホルスターからベレッタを抜いて階段を駆け上がり、直ぐ近くの柱の陰からナイフを持って飛び出してきた男子生徒の足に弾

を当てて体制を崩し、一気に距離を詰めて首の後ろに手刀を喰らわせて氣絶させた。

次に俺はナイフを左手で取り出して、右の瓦礫から出てきたナイフを持った男子生徒と拳銃を構えた女子生徒に向かつて構える。銃の射線から逃れるために、突つ込んでくる男子生徒の陰に隠れた。斬りかかるうとナイフを少し振りかぶった男子生徒にかなり至近距離まで肉薄してナイフを封じ、右肘を鳩尾に入れる。そして氣絶した男子生徒を盾にして、発砲しかねている女子生徒の脇腹に発砲して狙いを外させてから接近し、ナイフを突き付けて反抗できなくさせた。

『チョロイな』

俺は生徒達を縄で柱に巻きつけ、3階に向かった。

3階を制圧した俺は、結構時間はかかったがその勢いのまま全ての階の生徒を倒し、捕縛した。

残りが居ないのを確認して、ビルを出た。

余談だが、3人ほど抜き打ちで教官が居たのだが、勝てないと判断してウマ～くやり過ごして放置した。

ビルを出ると、蘭豹が俺を待っていた。

「なかなかやるやないかい。時間がかかったとはいえ、まさか全員を捕えるとわ思わなかつたで。」

『お褒めの言葉、ありがとうございます。』

蘭豹の褒め言葉に、軽く礼をしながら答える。

「ところで偶然遭遇しなかつたのかは知らんが、中に教官3人を抜き打ちで隠れさせていたんだが気づいとつたか？」

『いえ、それは気づきませんでした。』

気づいてたのに無視して戻つて来たと知られたら何を言われるか分からなかつたので、嘘の返答をする。

「そつか。まあそんなことはええわ。とりあえず結果を言つで。

毒島、お前はAランクや。』

▲ランクか、まああのモード♪を使わなかつたのだから妥当な結果だつ。

結果にある程度満足した俺は、蘭豹に一礼してその場を去つた。

俺は第三男子寮のキンジの部屋の前に立つていた。

高天原先生にこの部屋を使うように指示をされたからである。

『教務科には従兄だつてこと教えてないのにな。』

とりあえず中に入るためにインター ホンを押した。

中からドタドタと足音が聞こえて、直ぐにドアは開かれた。

「どちら様・・・って金助?どうしてここに?」

中からドアの隙間からキンジが顔を出した(当たり前だ)。

『他に空き部屋が無いらしくてね、ここを使って先生が。入つて良いか?』

事情を説明し、俺は部屋の中に入つた。

すると、中には何故か朝襲つてきた神崎・H・アリアがいた。

『ゲ、神崎・・・!』

朝のことを思い出し、露骨に嫌な声を出してしまつた。

「アリアで良いわよ。それとゲ、ってなによ。あたしが何かしたかしら?」

「ヨイシ、どうやら朝の出来事を忘れてやがるな。

若干イリシとした俺は朝襲われたことを、嫌みつたらしく説明してやつた。

『

「・・・てことでお前はキンジと俺を間違えて襲つたつてこと?』アリアが言つには、興奮していたアリアは、一旦どこかへ行つたキンジが戻つて来たと勘違いして襲つてしまつたらしい。

ていうかキンジはアリアに何をしたんだらう・・・。

キンジの方を見ると、少し顔をうつむかせた。

「そうか、あのモードか・・・。

「そうよ。悪かったわね。・・・てことはあの時に逃げたのはキン

ジだけじゃなくてコイツも・・・キンジだけのつもりだったけど、
決めたわ。」

アリアは少しためでから、こう言った。

「キンジ、金助。アンタ達、あたしのドレイになりなさいー。」

俺とキンジの中から魂が抜けていくのが分かった。

第2話～ランク決めと奴隸宣言～（後編）

蘭豹の関西弁が微妙でまともらないです　ｗｗ

第3話～仮面の男と神殺し～（前書き）

今日は長めです。

第3話～仮面の男と神殺し～

まさかの奴隸になれ宣言のあと、何故かある女物のトランクを部屋の隅にどけて、アリアの要望——実際は命令に近い——で3人でインスタントコーヒーを飲んでいた。

このコーヒーなかなかいけるな。とか考えている俺の横で、アリアは出されたインスタントコーヒーを不思議そうな目で見ている。

「これホントにコーヒー？」

「どうやらアリアはインスタントコーヒーを知らないらしい。

「それしかないんだから有り難く飲めよ」

とキンジ。

「・・・へんな味。ギリシャコーヒーにひつと似てる・・・・・・

毒味をするようにインスタントコーヒーを飲んでアリアはそう言った。

なんて贅沢な奴だ。一回アリアには我がデルタフォース名物のコーヒー 別名：黒い水 を飲ませなければいけないようだな。

あれほど不味いコーヒーは世界中探してもなかなか無いだろうからな。

「味なんかどうでもいいだ。それよりだ」

キンジは一度区切つてコーヒーをすすり、テーブルの椅子に腰をかけて続ける。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその・・・・お前を怒らすような事を言つてしまつたことは謝る。
でも、だからってなんでここに押し掛けてくる

そう口をへの字に曲げながらキンジが言つと、アリアはカップを持ったまま、きろ、と紅い目だけを動かしてキンジを見て、口を開く。
「分かんないの？」

「分かるかよ」

「あんたならどうに分かってると思つたのに。んー……でも、
そのうち思つて当たるでしょ。まあいいわ」

いや曖昧過ぎだろアリアさん。

ズズズ・・・「一ヒーハマウム。

「ねえ、おなかすいた」

アリアは話題を変えつつ、ソファの手すりに身体をしなだれかけさせた。

コイツつてこきなり女っぽい仕草をするんだな。

キンジは顔逸らしてるし。

ていうか俺も腹が減つてきたな。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

『え？ 無いの？』

「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」

「食いものはいつも下のコンビニで買つてる」

「こんびに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ行きましょう」

「じゃあって何でじゃあなんだよ」

「バカね。食べ物を買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」

おお、これがズレ漫才といひやつか。言葉のキャッチボールが成立していいなぞ。

ていうかアリア、ここで夕食食べてくつもりなのかよ。

キンジが頭痛っぽいながら頭を押さえていると、アリアはバネでも付いてるかのように、ぴょーん！ とソファからジャンプして立ち上がり、キンジことこじと近づいて上目使いでキンジを見上げる。うわ、やっぱりちっさいなー。

「ねえ、そこの松本屋の『ももまん』って売つてる？ あたし、食べたいな」

とこうことで3人でコンビニに行くことになつた。

ももまんとまー一昔前にちょっと流行った桃の形をしただけの「ぐく普通のあんまんらしい」。

それをアリアはなんと7個も買ったのだ。
全部食べるわけないよな、と思つていたが、もうすでに5個平らげ
ている。

ちなみにキンジはハンバーグ弁当、俺は材料を買ってきて台所で炒
飯を作つている。

やつぱり料理が出来るつてのは良いよな。
皿に乗せてリビングに行くと、キンジはわざの奴隸宣言の意図を
確かめていた。

「ドレイつてどういう意味だ？」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活
動をするの。もちろん金助もね」

アリアはももまんをほおばりながらモモモモと説明をする。
てかドレイつてそういう事かよ。

『強制ですか・・・』

「何言つてんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵
科に転科したんだぞ。

それにこの学校からも、一般の高校に転校しちゃつと思つてる。武偵
自体、やめるつもりなんだよ。

それを、よつによつてあんなトチ狂つた所に戻るなんて——ムリ
だ

俺はキンジの横に座りながら話を聞く。

ていうかキンジが転校するつもりだつていうのは知らなかつた。

昔は金一さんみたいに立派な武偵になるつてはりきつてたのにな・
・。

まあその田標だった金一さんが亡くなつたんだから、分からぬ話
でもない。

初代・かの有名な名奉行、遠山の金さんから続く遠山家の間は先祖代々正義の味方をしていた。

時代によりその職業は違つたが、遠山家の人間はヒステリア・サヴァン・シンドローム（HSS）——俺とキンジはヒステリアモードと呼んでいる——という神経性の特殊な遺伝能力を持つていて、恋愛時脳内物質が一定以上分泌されるとそれが常人の30倍もの量の神経伝達物質を媒介して、大脳・小脳・脊髄などの中枢神経の活動を劇的に亢進させ、論理的思考力・判断力・更には反射神経もが飛躍的に上昇し、一時的に人が変わったようなスーパー・モードになれた——当然キンジや俺にも遺伝している——のだ。

ちなみに恋愛時脳内物質の分泌を、一言で言えば「性的に興奮すること」である——俺は例外だが——。

キンジの兄の遠山金一はヒステリアモードを完全に操る非常に優れた武僧でとにかく強く、正しく、そして誰よりもやさしい人だつた。味方が敵に囮まれて他の仲間から見捨てられた時も、金一さんは見捨てずに無傷で助け出したという話もあるほどだ。

だが、金一さんは去年のクリスマスに浦賀沖で海難事故に遭い、乗客を全員避難させたがそのせいで逃げ遅れた金一さんは帰らぬ人となつた。

捜索しても死体は見つからず、それどころか乗客たちからの訴訟を恐れたクルージングイベント会社、そしてそれに焚きつけられた一部の乗客たちは、事故の後金一さんを激しく避難した。

曰く、「船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかつた無能な武僧」と。

ネットや週刊誌、それにテレビなどのあらゆるメディアで避難され、遺族であるキンジに罵詈雑言を吐き、更に謝罪しようとまで言つたのだ。

俺は情報操作でキンジとの繋がりを隠ぺいしていたので何もなかつたが、そのニュースを見ているだけで胸が痛んだ。

金一さんは人を助けて犠牲になり、スケープゴートにさせられた。

キンジは、この事件の原因を「武偵なんかをやつていたから」と、金一さんが武偵になる要因——兄を破滅への道へ追いやることととなつたヒステリアモードになることを嫌になつた、と聞いた。キンジが武偵をやめると言つても無理はない。

だがそれに対しアリアは、

「あたしがキライな言葉が3つあるわ」

と聞いていない。

何だよ感傷にひたつてた俺がバカみたいじゃねえか。
キンジも同じ考え方しく

「聞けよ人の話を」

と反論する。

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。あたしの前では一度と言わないこと。いいわね？」

そう言つてアリアは7つ目のももまんを平らげた。

「キンジのポジションは……そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ。金助はまだ実力が良く分かつてないから保留ね」「保留つて扱い酷くない？」

ちなみにフロントとは、フロントマン、武偵がパーティを組んで布陣する際の前衛の事である。

最前線で戦うため、負傷率ダントツの危険なポジションである。「よくない。そもそもなんで俺なんだ？」

とキンジが理由を聞こうとする。

「太陽は何で登る？月はなぜ輝く？」

『いや話飛び過ぎだろ・・・』

そんな俺の言葉もむなしくアリアは続ける。

「キンジは質問ばっかりで子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

イヤお前にだけは言われたくないね

と言いつこうになつたが、逆鱗に触れそつだつたのでこりえる。

イヤお前にだけは言われたくないね

『（キンジ！）』

俺は小声でキンジに話しかける。

「（ああ、分かってる。）」
（いつとは、会話のキヤッヂボールが成り立たない。対抗するにはこちらも自分の要求を単刀直入にたたきつけるしかない。そつだろ？）

『（その通りだ。てことで行け）』

アリアの死角でキンジに親指を立てた右手を出す。

キンジはそれにつなぎいたあと、アリアに向かつて斬りこんだ。
「とにかく帰つてくれ。俺は金助と話したいことがあるんだ。帰れよ

これはなかなか良かつたんじゃないだろうか。と思つてた矢先、アリアはこう答えた。

「まあ、そのうちね」

俺は椅子からズルッと滑り落ちた。

「そのうちつていつだよ」

「あんた達が強襲科であたしのパーティーに入るつて言つまで」

『（頑固だな・・・！）だがもう夜だぞ？』

「なにがなんでも入つてもらつわ。私には時間が無いの。つこと言わないと・・・」

アリアはそこで言葉を止める。

「いわねーよ。なら？どうするつもつだ？やつてみろ」

キンジが毅然とした態度で断ると、アリアはその大きな眼でキンジをにらみ、こう言った。

「言わないなら、泊つてくれから

『（・・・はあ！？）』

俺とキンジの顔が、痙攣を起したように引きつる。

「ちょ・・・ちょっと待て！何言つてんだ！絶対ダメだ！帰れ！」

キンジが慌てて止めに入る。

当然だろつな、ヒステリアモードになる要因を泊めるなんてことキンジが許すはずがない。

「つるやこー泊つてくつたら泊つてくーー長期戦になる事態も想定済みよ！」

と言つてアリアは部屋の隅に置いてあるトランクを指さした。

『「あれ宿泊セツトかよーーー』』

キンジとシンクロッシー口//をしたところで、アリアが突然態度を変えた。

『　　出でけーーー』

『いや何でー？それはこっちのセリフだぞーーー』

『な、何で俺らが出ていかなきやいけないんだよーーー』前のお前の部屋か！』

『分からず屋にはおしおきよー外で頭冷やしてきなさいーーーしばりへ戻つてくるなー』

子供みたいに両ひぶしを振り上げ、アリアは俺たちにネコのような犬歯を剥ぐのだった。

『追いで出されちまつたな・・・』

『そりだな・・・しかも中から鍵かけられてるし・・・』

俺とキンジは、部屋の前で肩を落としていた。

『せつかくゆづくり話でもしようとしてたのにな。・・・まあまた今度の機会にするか』

『だな。で、この後どうする？俺はコンビニで時間つぶすナビ』

『んー・・・俺は少し散歩してくるかな？』

キンジの間に、少し考えてから答えた。

『そうか。学園島の中は多分安全だらうけど一応気をつけろよ。キンジはもう言い残して下に降りて行つた。

『俺も行くか』

俺もキンジの後を追いつよつて下に降りた。

『夜中の一人散歩なんて久しぶりだな・・・普段は基地の中で訓練ばかりしてたし、外にいても基本的に誰か付いてきてたしな』

散歩に出たは良いが、行くところを思いつかなかつたためとりあえず海岸沿いに歩くことにした。

潮風が気持ちいい。

『てか東京湾つてどんな魚居るんだろうな・・・潜つて取りに行こうかな?』

などといふことを本氣で考えていたら、いきなり自分の真上に殺気を感じたのでバックステップで下がる。俺がバックステップをした直後、元々俺が居た場所に刀が突き刺さつた。

上を見ると、電柱の上にトレンチコートみたいな服を着ていて、能などでよく見かけるような面を付けた男が立っていた。

若い感じがするが、それでいて熟練した武人のような重い威圧感を放つている。

『いきなり襲つてくるとは・・・何者だ?』

右手でベレッタを抜きながら、俺は仮面の男に声をかけた。

「フフフ、そう身構えるんじゃない。君とは戦つつもりはない。」

ハツキリと丁寧な中に、子供のような無邪気さを兼ね備えたような声で男は返してくる。

『何者だと聞いている。答える』

俺はベレッタを仮面の男に向けた。

「戦つつもりはないと言つただろう? それとも君は僕との死合いを望むのかな?」

気がつくと仮面の男は俺の目の前に立つていて、ベレッタを持つ右手を掴んで動けなくさせられていた。

速い・・・!! ヒステリアモードじゃなかつたのを差し引いても、速い。

動きが待つたく見えなかつた。

仕方なく俺は空いている左手を上げて降参の意を示す。

仮面の男は俺が降参したのを確認ーー仮面で隠れてるので良くな見えないがーーしてから手を離した。

「ではまず私が名乗ろうか。私は鎌。君に渡すものがあつて来た。」
鎌と名乗る男は、背中に背負っていた細長い袋に入った何かを俺に差し出してきた。

『これは・・・?』

「星伽・毒島から預かりし神器が一つ。神殺し、受け取るがいい」
毒島のところで若干ビクッと反応しつつも、言われるままに細長い袋を受け取ると、ずつしりとした重みが伝わってくる。

『・・・刀か』

袋の中身を取り出すと、平均的なものよりも若干長めの日本刀が入つていた。

「先に言つておくが、その刀は普通の刀ではない。その名の通り、神を斬る為に作られた刀だ。

そして、君はこの刀を用いてあるものを守らなくてはいけない。これはもう、逃れられない運命だ」

『何でそんな代物を俺に渡すんだ?』

どれだけ考えても、何故俺なのが分からぬ。

だが、男から帰つて来た答えは予想以上の物だつた。

「君が森羅蒼天流の後継者だからさ。それが一番の理由だ。」

森羅蒼天流とは、昔から毒島家につたわる秘剣で、その技は全て必殺の剣になり得る程の剣術である。

俺は、森羅蒼天流を母から直接受け継いでいる。

それを知っているのは毒島と深い関わりを持つ遠山家の一部の物か、こちらも同様深い関わりを持つ星伽の人間の可能性が高い。

それ程の機密情報を、こいつは知つている。

それどころか、俺に関する情報はほとんど筒抜けと考えても良いだろづ。

『納得がいってないみたいだね。まあ当然か。その刀の事は、星伽の人間から聞けばいい。』

ということで、僕は帰らせてもうつよ。君とはまた遠くない未来に会う、そんな気がする。

その時に、また会おう。」

そう言って男は姿を一瞬で消した。

さつきは心地よく感じた潮風は、今となつては冷たく吹き付ける、不愉快な風になっていた。

第3話～仮面の男と神殺し～（後書き）

後半の文章が自分でも良くわからなくなってしましましたww
以後、気をつけます

第4話～幼馴染と凸凹トリオ結成～（前書き）

前回の話、無理やり感が凄かったですね（自分で言つた）
ただ、早めに仮面の男を出しておきたかったもので…。

第4話～幼馴染と凸凹トリオ結成～

鎌と名乗っていた男が消えたあと、神殺しを背中に背負い俺は帰路についていた。

あまり気分が良くないので、今日はもう寝てしまおつ。

そう考えながら歩いていたら、前方から足音が聞こえた。

カン・・・力カン・・・

何この音・・・下駄？

真っ暗で姿は確認できないが、これは恐らくアイツだな。

「白雪」

暗闇の中から姿を現した巫女姿の少女に、そつ呼びかけた。

「え？・・・もしかしてキン君？」

透き通るような綺麗な雪肌、綺麗な長い黒髪、整った顔立ち。

絵に描いたような大和撫子のこの少女は、星伽白雪。

代々続く星伽神社の巫女で、俺とキンジの幼馴染だ。

昔日本に来た時、俺は基本的に白雪の実家である星伽神社にお世話——基本男子禁制なのだが、遠山と毒島の家の者だけは例外で入れる。さらに、俺の両親は父が遠山で母が毒島の家の間のため、俺は星伽と特別縁が深い——になっていた。

そのときに良く遊んでいた子供の一人が白雪だ。

『久しぶりだな、白雪。確かに最後に会ったのは4年くらい前だったよな。』

「いつ日本に帰つて來たのキン君？　あと今着てるそれつて、武偵高の制服？」

ちなみに白雪はキンジを「キンちゃん」、俺を「キン君」という呼び方で呼ぶ。

ややこしいたらありやしない。

『今日の朝こっちに着いてね、今日から東京武偵高に転入したんだ』

俺がそう言つと白雪は信じられないといった顔をしたあと、うれし

そうに俺の手を握つてぴょんぴょん跳ねながら

「ホントに！？キン君がうちの学校に！？わーい」

と大声で喜んでいる。

近くに寮無くて良かつたな。明らか近所迷惑だぞこれ。

『高校生になつて大人になつたかと思つたけど白雪はまだ子供だな』
そう言い白雪の頭にポンと手を置く。

「キンちゃんと同じこと言つてる。」

白雪は若干頬を赤らめ、顔を少し逸らしながら答える。
風邪でも引いてるのかな？

星伽に健康管理を徹底されている白雪が風邪なんて珍しいな。

『あ、そういうえば白雪』

星伽で思い出した。これのことを。

「なに？キン君」

笑顔で白雪が聞き返してくれる。

『白雪、この刀を知つてるか？』

そう言い、俺は神殺しを出して白雪に見せた。

すると白雪は表情を一変させ、まるで国宝でも見るような眼で神殺しをじつくり見回す。

「・・・これ、何でキン君が持つてるの・・・？これは本来しかるべき場所に保管されているはず・・・」

驚愕した顔の白雪に、俺はさつきの男との間にあつた出来事を白雪に説明した。

『そういうわけで白雪、何かこの刀について知つてるか？』

『ゴメンねキン君。私はこの刀のことはあまり知らないの。
だけど少しだけなら知つてる。この刀は星伽に代々伝わる秘宝の一つで、詳しく述べられないんだけど特別な金属でできていて、使用者を選ぶの。刀が。』

『刀が使用者を選ぶ？なんだそれ？』

俺は思つた疑問をそのまま口にした。

『ゴメンね、そこまでは分かんないんだ・・・』

白雪は顔を俯かせる。

『白雪は悪くないよ。それほど機密扱いな代物なんだろ?』
コクツ、と白雪はうなずく。

しかし尚更分かなくなつたぞ。

『じゃあもし何か分かつたら教えてくれ。』

白雪を部屋に送り、そう告げて俺は今度こそ部屋に帰り、寝た。
——余談だが、アリアが仕掛けた対人地雷等のせいでベッドがある
寝室の中に入れず、別室で寝た。

翌日の5時間目、俺は強襲科で最低限のノルマをこなし、一人で射撃訓練をしていた。

ガキの頃から銃を触っていたから、射撃は俺の十八番だ。
単純に射撃だけなら、ヒステリアモードを使わずともSランクに近い腕を持っている。

速攻で狙いを定め、引き金を引く。

ズガガガガガン!!

ベレッタから発射された弾は、全てターゲットの中央付近に当たる。

「凄いね、毒島君。全弾命中なんて」

マガジンを交換していると、後ろから誰かが話しかけてきた。

『君は・・・確か同じクラスの不知火君だつたね。何か用かい?』
話しかけてきたのは、同じA組で同じ強襲科の不知火亮だつた。
イケメンで礼儀正しく、性格も真面目で武健高では珍しい人格者で、
キンジ曰く「モテる」らしい。

ランクはAで、ナイフ・格闘・射撃の全てで安定したスキルを持つ
ている、とキンジが言つていた。

「不知火でいいよ。実は、毒島君がアメリカ陸軍のデルタフォー
スの隊員だつて話を聞いてね、少しQOCで手合わせして貰えるか
い?』

噂に聞いた通り礼儀正しいな。

こいつとは上手くやつていけそうだ。

『いいぜ。じゃあやろうか。』

俺たちは軽装のA装備に着替えて、体育館みたいな訓練施設に移動した。

噂の（？）転入生が格闘での模擬戦をやると聞いて、気づけばそれなりにギャラリーが出来ていた。

『さあ、始めよう。先手は譲るよ。』

そう言い、柔術の構えをとる。

「ん？ 軍隊格闘じゃないのかい？」

『それでも良いんだけど俺は柔術が得意なんだ。』

「そう。じゃあお言葉に甘えて僕から行かせてもらひよー。」

不知火は、接近して左足で足払いをしてきた。

『なかなか鋭いが、甘い！』

俺は不知火の足払いに対し、右足を絡めて不知火の動きを制限される。

「くつ！！」

不知火は投げ技をしようとしたのか、苦し紛れに俺の右手を掴んできた。

『ぬん！！』

掴まれた右手を利用して後ろに引き、不知火が前かがみになつたところで絡ませた足も引いて転ばせ、手際良く腕ひしぎ十字固めをかける。

ギヤラリーからは、「おおー！」という歓声が上がった。

俺の脚にタップしてきたたので締めをやめて、不知火が立ち上がるのを手伝う。

「流石だね、手も足も出なかつたよ」

苦笑いしながら不知火が言う。

『一撃目の足払い、あれが駄目だつた。柔道の足払いのようにやるとさつきみたいになるから、こうするんだ』

一気に身をかがめ、右足を伸ばしたまま回転して不知火の足を払う。体制を崩して倒れたが、そこは流石Aランクの不知火、きちんと受

け身をとつてゐる。

『ちなみに今のは相手が武器を持つてゐるときに有効な技だ。いきなり低い攻撃がくるから、よほどの使い手でない限り跳んでかわすしかなくなるんだ。』

不知火は立ち上がりながら成程、と相槌を打つてくる。

『だが、不知火は俺が足を絡ませたときに転ばずに、更に反撃してきた。ホントはあの時に転ばすつもりだつたんだけどね。

だから、気を落とすことは何もないからね。』

授業時間が過ぎていたので、じゃあね、と言い残して俺は強襲科の施設を後にーー出来なかつた。

さつきの模擬戦を見ていたギャラリー達が、こそつて挑戦してきたのである。

結局、何故か暴徒と化したギャラリー全員を同志討ちをさせたりして全員倒し、部屋に帰る頃には口が沈みかけていた。

強襲科での乱闘騒ぎの翌日、しばらく部屋から出ないとキンジとアリアに告げ、俺はやつと届いた荷物を自室に運んで中を整理していった。

届いた段ボールは、大小合わせて6つ。

それぞれに「武器?」「武器?」「機材?」「機材?」「機材?」「衣類」と書かれている。

俺はまず、普通サイズの「武器?」の段ボールを開けた。

中には、アメリカで愛用していた銃器と付属品、予備パーツに改造用パーツなどがびつしりと詰められていた。

その中から俺は2丁の大型拳銃、H&K SOCOM (Mk23)を取り出した。

『やつぱりSOCOMは良いねえ』

俺が手にしている2丁のSOCOM、実はこれ、俺が一から組み立て色々とアレンジ―改造とも言ひ―を加えた俺専用の拳銃である。

施した改造の例を上げると、薬莢の排出を速くして連射速度を上げたり、マガジンを外してから銃の横に取り付けたスイッチを切り替えると内部の機構が変化して50口径の弾を撃てるようになる改造——これはかなり金がかかっていて、多用すると壊れやすくなる——もある。

中の者を銃器専用のケースに入れ替えて、武器?の箱に手をかけた中には様々な刀剣が入っていたが、中でも異質なのは、三節棍みたいに柄をいくつにも折りたためるようになつていて、先端は薙刀のような形状で青龍の装飾が施されている武器。

三国志で有名な軍神『関羽』が使っていたとされる、青龍円月刀だ。武器としては重くて使いこなすのが難しいが、上手く扱えればかなり強力な武器となる。

俺はこの武器を折りたたんでいつも背中に隠している。

青龍円月刀を折りたたんで背中に隠してから俺はでかい段ボールに入った機材?～?を一気に開けた。

機材とは、捜査などに使うコンピューター一式と、それを映す巨大ディスプレイに周辺機器である。

俺の特技の中に、ハッキングがある。

自作したソフトをいくつも用いれば、ペンタゴンにも潜りこめる——実際は軍関係で行つたときにシステムを把握したから——ほどである。

機材を全てセットすると、部屋が物凄く窮屈になつた。

最後に衣類の箱を開けると、良く着る私服や軍服、潜入時に着る特殊スーツなどが入つていたが、一番下に衣類に交じつて小さい箱が入つていた。

小さい箱を開けると、それは武偵弾がいくつも入つた詰め合わせセットみたいなものだつた。

武偵弾。それは一発一発が多様な特殊機能を秘めた強化弾。銃弾職人にしか作れず、希少で高価なために超一流の武偵にしか流通しない必殺兵器である。

服をクローゼットにしまい、武偵弾はさつき武器を入れたケースに入れた。

『さて、機材が届いたわけだし、今後の対策のためにアリアの事でも調べてみるか』

PCを起動させ、全て英語で書かれているサイトでアリアの情報を見つけ、読み上げる。

『神崎・H・アリア。14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍したSランク武偵。

まあそういうな。

武器は2丁のガバメントに2本の小太刀、4つの武器を使いこなすことから二つ名は「双剣双銃のアリア」。ロンドン武偵局にいた時の実績が、99回連続で犯罪者をたたた一度の強襲で逮捕。検挙率は100%。

・・・俺はこんな奴に俺は一度襲われたのかよ。

祖母がイギリス王家からD e mの称号を授与されていて、貴族である。

だからあんなに世間知らずなんだな。』

金助がサイトのめぼしい情報をメモしながらツッコんでいるその頃、キンジはアリアに強襲科に戻るようにアプローチを受けていた。

「今はムリだ。俺にはお前が言つてるような実力はない」

「今は、ってことは何か条件があるの？協力するから言いなさいよ」「協力つて・・・！」

キンジはアリアが知らない間に放った爆弾発言に顔を赤らめる。

実力を出させるために協力する、と言つてたが、それはキンジを性的に興奮させるということと同義であった。

「教えなさいよ！なんでもするから・・・！教えて・・・教えてなさいよキンジ・・・！」

良く考えてみれば、しばらく部屋から出てこないと黙っていた金助を除けばこの部屋にはアリアとキンジの二人だけ。

そのシチュエーションとアリアの発言が、キンジをヒステリアモードにしかけていた。

あんなモードになりたくない……

その思いがキンジを支配し、田の前にいたアリアをソファに突き飛ばし、顔を逸らして言った。

「……1回だけだ。 戻つてやるよ……強襲科に。 ただし組むのは1回だけだ。

戻つてから一番最初に起きた事件を一つだけ、お前と一緒に解決してやる。 それが条件だ」

そこでキンジは言葉を一度区切った。

「だから、転科じゃない。 自由履修として強襲科の授業を受ける。 それでいいだろ?」

キンジの考えはこうだった。

自分の手駒を猛烈に欲しがっているアリアに、ヒステリアモードでない平凡な自分を見せつけて失望させる。

それに対しアリアは

「……分かったわ。 ジゃあこの部屋から出て行つてあげる。 あたしにも時間は無いし、その一件であんた達の実力を確かめるわ。」
しぶしぶ、といった形でアリアは承諾した。

「どんなに小さな事件でも一件だからな」

あとからとやかく言われないために、キンジは念を押す。

「OKよ。 その代り、どんな大きな事件でも一件よ。」

手抜きはしないこと、そうアリアが付け加える。

「分かった。 絶対に手抜きはしない。 全力でやつてやるよ。」

通常モードの俺の全力、でな。

キンジは心の中で付け加えた。

ちなみに当然パーティーの中には金助も含まれている、ということと金助は後になつて知ることとなつた。

かくして、アリア・キンジ・俺の一度きりのパーティーが結成された。

第4話～幼馴染ヒロアリオ結成～（後書き）

「これで金助君にやれやんとした武器を使わせてあげられますね。」

〔実際はもひとつ早く出す予定だったんですけど、武器の設定を考えるのに時間がかかりてしまいましてww〕

とこり」とド次回、ヒロアリオが事件に挑みますー！

第5話～アリアが居ない夜とバスジャック～（前書き）

今回は新キャラクターが登場です！
だけど出番は少ないです

第5話／アリアが居ない夜とバスジャック／

知らぬ間にアリアとパーティを組むことが決まった次の日、俺は鎌から受け取った神殺しを試すためにアリアと対峙していた。

「やあ！！」

アリアは2本の小太刀を構え、物凄い速度で接近して小太刀を交差させるように斬りかかってくる。

バックステップでかわし、右足で踏み込んで片手で突きを繰り出す。アリアは片方の小太刀の上を滑らすようにして流す。

直ぐに神殺しを戻し、八相で構える。

アリアは接近しようと一歩踏み込もうとするが、先にこちらから接近して牽制する。

結果、アリアは接近できずに自分から距離を置く。

アリアと俺では身体的にリーチがかなり違い、更に武器もこちらの方が長いのでアリアは俺の懷に入りにくくなっている。

それでも本来、SランクのアリアとAランクの俺の実力差はそれなりにあるので、これくらいのハンデがあるうとアリアが攻めあぐねることはない。

では何故アリアが攻めあぐねているのか？

答えは単純、周りにギャラリーが大勢居てアリアの身体能力をフルに使った素早い動きが出来ないので。

ちなみにこのギャラリー、俺が情報を流して意図的に集めた。

常に自分の有利な状況を作れ。というのが父の教えに従つただけで、断じてズルなどではない。

断じて卑怯ではない！！俺は情報を流しただけで直接呼んでは——それを屁理屈といつ——いない！！

膠着状態が1分くらい経った時、アリアが我慢できなくなつたのか、正面から突っ込んできた。

『功を急いたなアリア。俺の勝ちだ！』

神殺しを振り上げ、アリアに斬りかかろうとした。

神殺しがアリアに届くその直前、突然強襲科の入口が開いた。

その場にいた人間全員が入口を振り返る。

唯一人を除いて。

「敵の前でよそ見しない！！」

アリアが小太刀の峰で、思いつきり俺の側頭部を殴った。

『頭は・・・無いだろ頭は・・・』

その言葉を最後に、俺の意識は途切れた。

『・・・ん？どこだーー』

目を覚ますと、真っ白な天井。

薬品の匂いがすることを考えると、ここは救護科の救護室のようだ。

アリアに殴られて気絶したあと、誰かに運ばれたらしい。

頭は・・・よし、痛みはない。

頭に痛みが無いことを確認し、ベッドから起き上がった。

それと同時に救護室の扉が開いた。

中に入つて来たのは、同級生で尋問科の九澄鏡花タキユウ
くすみきょうかだつた。

俺が転入してから、色々と面倒を見てくれている。

ちなみにかなりの美少女だ。

だが綺麗なバラには棘があるという言葉の通り、いざ本業である尋問をするとき性格が一気に変わつて凶暴になる、といつ噂がある。

「あ、毒島君アザミ君気がついたの？」

とことこという擬音が聞こえてきそうな歩き方で歩み寄つてくる。

『さつきね。ところで鏡花がここまで運んでくれたのか？』

『うん。そうだよ』

『そうか、それはありがとう。でも重かつただり？』

俺は身長が高く、自分で言つのもなんだがかなり鍛えてるから体重が80kg近くあるのだ。

『不知火君が手伝つてくれたから平氣だつたよ』

鏡花が僅かに頬を赤らめて言う。

『不知火が？ あとで礼を言わないとな』

ベッドから降りて、横に立てかけてあつた神殺しを腰に差す。

すると鏡花が心配そうな顔をして

「頭の怪我は大丈夫？ 私、見てたけど凄い勢いで殴られてたよ？」

と俺に近づいて言つてくる。

身長差があるので自然と上目使いになつていて。

これがキンジだつたら軽くヒスつて——ヒステリアモードになる＝ヒスる より——たかもな。

俺の場合は、何故かは分からないが、異性に興味が殆どない——医者には恋愛できな感情が欠落してると言われた——ため通常の性的興奮でヒステリアモードになりにくいのだ。

一応なれるのだが、よっぽどの事が無いとなれないのだ。

その代りに俺だけに現れた別なヒステリアモードのスイッチがあるので、それは次の機会で。

『大丈夫だ。もう一度言うけど、運んでくれてありがとう。じゃあ俺はこれで。』

そう言い残して部屋に戻つた。

密かにまた鏡花が顔を赤くしているのには気がつかずに。

『ただいまー』

部屋に帰ると、キンジがソファに座つて一人でテレビを見ていた。

「おかえり金助。アリアに殴られて氣絶したつて聞いたが大丈夫か？」

？

『大丈夫だ。ところで俺を殴った女王様は？』

アリアが居ないことを不審に思い、確認する。

「アリアは自分の部屋に帰つたよ。言わなかつたか？」

『そりいえば昨日言つてたな。……これでやつとゆつくり話せるな。』

「そうだな。じゃあまずはそっちの話を聞かせてくれよ。少佐になつたんだろ？』

『ああ。何回も潜入任務をこなしてたら、いつの間にか少佐になつてたよ。この年でたくさん部下が出来て大変だよ』

『金正叔父さんは元気か？叔父さんとは去年会つたけどそれ以来何

の情報も無かつたからな。』

『去年といえば、金一さんの葬式か・・・』

『俺は任務で行けなかつたからな。』

『父上は元氣すぎるんじやないか、つてくらい元氣だよ。今も多分基地で隊員をしごいてるだろうね。』

『俺が話すばかりじゃなくて、キンジも話せよ。』

『軽くウインクし、キンジに話すよう促す。』

『俺は・・・これと言つて報告することがないんだよなあ・・・』

『ハハツ、何だよそれ。』

クエスト

『じゃあ去年強襲科に居た時にやつた任務

の話でもしてくれよ。』

『そうだな、じゃあ去年の夏にやつたあの任務の話にするか。』

『あれは確か夏休み直前で、不知火達と一緒にやつたんだけどさーー俺たちはその夜、時間を忘れて遅くまで語り合つた。』

次の日の朝、俺はアメリカの父に現状を報告していたため、7時58分のバスに乗ることが出来なかつた。

キンジは結構先に行かせたので、そのバスに乗つているはずだ。徒步じや確実に間に合わないため、男子寮の駐輪場にシートをかぶせて隠しておいたバイクにまたがる。

もしもの為に、ヘルメットは二つ備え付けてある。

そのうちの一つをかぶり、俺は男子寮から出た。

すると、雨の中キンジがバス停の前で立ち尽くしていた。キンジの前でバイクを止める。

『金助か。なんでバイクなんだよ・・・』

『乗り遅れたのか？乗つてけよ。』

キンジに呼びのヘルメットを渡し、キンジが乗るスペースを空けた。

キンジが乗り込み、俺にしつかり掴まつたのを確認してからバイクを走らせた。

雨で滑りやすくなつた道を走り、専門校区の前にさしかかったところでキンジの携帯が鳴つた。

「アリアか？ 今は強襲科の前だが・・・え？ 」装備に着替えろつてなんでだよ。授業は5時間目からじや・・・」「

アリア相手に話していたキンジが、突然口を止めた。

俺はバイクを止める。

『どうしたキンジ？ 何かあつたのか？』

電話を切つて携帯を閉じたキンジに問いかける。

すると、キンジから予想外の言葉が発せられた。

「事件が起きたらしい・・・」装備に着替えて女子寮の屋上に来いつて

事件。キンジはそう言った。

最初に起きた事件を、大小問わず一緒に解決する。

それがキンジがアリアに組むことを決めたときに提示した条件だ。電話越しに軽く聞こえたアリアの怒鳴り声から察するに、大事件だと思われる。

急いでC装備に着替えた俺達は、急いで女子寮の屋上に向かつた。

屋上のドアを開くと、無線機に何かを怒鳴つているアリアが居た。それともう一人。
「レキ」

キンジがドアのすぐ近くに体育座りをしていた少女に声をかけた。

彼女の名はレキ。

狙击科の生徒で、入試の時からずつとランクを維持し続けている狙撃の天才だ。

こんなやつを呼ぶつてことは、やはり大きな事件であることは間違いないなさそうだ。

「時間切れね・・・もう一人くらいランクが欲しかつたけど、皆

他の事件で出払つてゐるみたい』

通信を終えたアリアが俺たちに近づいてくる。

『この4人パーティーで追跡するわよ』

『追跡つて何をだ？ 何が起きたんだ？ アリア
俺は状況説明^{ブリーフィング}をアリアに求めた。』

アリアから返ってきた言葉に、俺とキンジは驚愕した。

『武徳高行きの7時58分に第3男子寮前に停車したバス。 そのバ
スに爆弾が仕掛けられたわ』

・・・爆弾？

『それつて・・・まさか・・・』

『そうよ』

アリアは言葉を区切り、溜めてからこう言つた。
『バスジャックよ！』

第5話～アリアが居ない夜とバスジャック～（後書き）

次回、3人がバスジャック事件で奮闘します！
お見逃しなく！

第6話「バスジャックと消えない傷」

アリアはバスジャックの犯人を、最近暗躍している「武偵殺し」なるやつの仕業だと断言した。

『武偵殺しの事を少し聞かせてくれないか?』

「いいわ。 武偵殺しは武偵が乗った乗り物に減速すると爆発する爆弾を仕掛け、遠隔操作でコントロールするの。

最初の武偵はバイクを狙われたわ。 次がカージャックでその次がキンジのチャリジャックで今回がバス。

やつの遠隔操作のときに使う電波にパターンがあつて、キンジの時も、今回もその電波をキャッチしたのよ。』

「でも武偵殺しは逮捕されたはずじゃ・・・?」

「それは真犯人じゃないわ・・・」

「何だつて・・・? 何の話をしてるんだ？」

「背景を説明してる暇はないわ! それにあんたには知る必要もない。このパーティーのリーダーはあたしよ!」

アリアがそう熱弁すると、急に俺たちは何かの陰に覆われた。

上を見るとそこにはヘリが降下してきていた。

こんなものまで用意してるとはな・・・

「・・・クソッ! やりやいいんだろ!」

やけくそ気味でキンジが叫ぶ。

「キンジ、金助。これが約束の最初の事件になるのね」

「大事件だな・・・俺はとことんツイてないよ」

『え? 大事件なのこれ? アメリカでは日常茶飯事だったけど』

「約束は守りなさい? キンジ。あんたが実力を見せてくれるのを楽しみにしてるから。

もちろん金助もね」

「言っておぐが、俺にはお前が思つているような力はないからな」

キンジはそう言ってへりに乗り込んだ。

『対テロ部隊の俺が言うのもなんだけどそんなに期待はしないでね
俺もキンジに続いてヘリに乗り込んだ。』

「万一ピンチになるようだつたらあたしが守つてあげるわ。安心な
さい」

「・・・・・」

アリアとレキも乗り込み、ヘリは台場方面に向かつて飛び立った。

男子寮前を出た後バスは、どの停留所にも止まらず暴走。その後車内からバスジャックされたと緊急連絡が入りました。

現在バスは青海南橋を渡つて台場に侵入しています

無線装置からオペレーターの説明が入る。

アリアの話によると、警視庁と東京武偵局の両方は動いてはいるが、先に電波を掴んで通報よりも先に準備を始めた俺たちが一番乗りのようだ。

「見えました」

レキの声に、俺達3人はそろつて窓の外を見た。

だが、距離がありすぎて車は小さすぎてよく見えない。

「何も見えないぞ、レキ」

「ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えています」

『良く見えるな・・・レキ、視力いくつ?』

「左右ともに6・0です」

軽いノリで超人的な数値を言つたレキに対し、俺らは顔を見合せ
る。

ヘリがレキの言つた通りに高度を下げる、本当にバスがあつた。
しかし速いぞ。かなり速度が出ている。

「空中からバスに飛び移るわよ。あたしはバスの外側をチェックす
るからキンジは内側の状況を確認。連絡して。レキはヘリで追跡し
ながら待機。」

金助は

「

『バスの上で前のセグウェイのようなやつが来ないか監視、だろ?』

アリアが言おうとした言葉を先に言い、天井のランドセルみたいな強襲用パラシユートを装着する。

「流石『デルタフォースの隊員ね』

アリアもそう言いながらパラシユートを装着する。

唯一不満そうな顔のキンジは渋々、といった感じで天井からパラシユートを外していた。

「準備はいいわね？ 行くわよ！」

俺たちは同時にヘリから飛び出し、パラシユートで自由落下に近い速度でバスに着地する。

キンジは滑つて落ちそうになるが、アリアに支えられている。

アリアはワイヤーを屋上にさして宙吊りの体制でバスの下を確認し、キンジは中から窓を開けてもらつて内側の確認に入つた。

かくいう俺は、強襲科に置いておいたアサルトライフル、M4A1カービンを構えて周囲を警戒していた。

「キンジ！ そっちの状況は！？」

アリアの声だ。

「アリアの言つていた通り、このバスは遠隔操作されている。そつちはどうだ？」

「・・・爆弾らしいものがあるわ。カンジスキーモードのC4、武偵殺しの十八番よ。見えるだけでも炸薬の容量は、3500立方センチはあるわ！」

『なんだと！？』

アリアの声に、つい叫んでしまう。

いくらなんでも過剰過ぎる炸薬量だ。

バスどころか電車だつて楽勝で吹き飛ばせる。

とその時、後ろから物凄い速度で接近してくるオープンカーが見えた。

その操縦席には、人の代わりにシロエが乗っていた。

『アリア！ 後ろだ！！』

「潜りこんで解体を試み　あつ！！」

俺の叫びもむなしく、オープンカーはバスの後方――つまりアリアに激突した。

『チツ！！』

俺は舌打ちしつつ、オープンカーのCINIに狙いを付けるが、今にも発砲してきそうな状況だったため屋上に伏せた。

中ではそれに気づいたキンジが生徒たちに声をかけて伏せさせていた。

それと同時に、CINIは側面からバスに向かつてまんべんなく発砲した。

銃撃が止むと同時に起き上がり、すぐさまオープンカーに向かつて跳んだ。

発砲した直後だつたために銃座は一いち方に反応するのが遅れ、その間に両脇のホルスターから抜いたMk2332丁で銃座を破壊し、オープンカーに乗り込んだ。

『アリア！！大丈夫か！！』

バスの後ろに車を回し、アリアの安否を確かめる。

「ヘルメットをかち割られたけどなんとか無事よ・・・それよりその車・・・」

アリアはワイパーで屋上に這い上がろうとしていた。

『さつきのつとつた。だがまだ安心できない。早いところ爆弾を解除しないとな』

バスがレインボーブリッジに入る。

車が無いところをみると、警視庁あたりが手を回したんだろう。アリアが這い上がったと同時に、ヘルメットを付けていないキンジが側面の窓から出てきた。

『キンジ！ヘルメットはどうしたの！？』

「運転手が負傷して、今代わりに武藤にメットを貸して運転をせせる」

「危ないわ！どうして無防備に出てきたの！なんでそんな初步的な

判断もできないのよ！直ぐに車内に隠れ　後ろつー伏せなさいよ

！何やつてんのバカつ！」

キンジに散々罵声を浴びせ、突然顔色を変えてキンジに向かつて突っ込んで行つた。

『まさかもう1台来たのか！！』

急いで車をバスの前に移動させる。

すると案の定、UNIを搭載したオープンカーがいて、キンジに狙いを付けていた。

『クソツ！！』

直ぐにMk23を抜いて狙いを付けるが、時すでに遅し。

UNIはキンジに向かつて弾を2発発射した。

『キンジ！！』

慌ててキンジの方を見ると、アリアがキンジを庇つておでこに掠るようになに被弾していた。

アリアも負けじと被弾しながらガバメントでUNIに発砲し、銃座から落としていた。

アリアはそのままバスの側面から落ちそうになつたが、キンジが伸びていたワイヤーを掴んで引っ張り上げた。

「アリアっ！！」

キンジがアリアを抱きかかるなか、銃座を破壊されたオープンカーがバスの横に回り込もうとした。おそらく体当たりをする気だらう。

『させるかっ！…』

Mk23でオープントンカーのタイヤに弾を当て、パンクしたオープンカーは回転しながらガードレールにぶつかり、爆発、炎上した。そしてその直後——パーン！

と銃声が聞こえてきた。

横を見ると、さつきのヘリがレインボーブリッジの横を並走している。

そしてその開かれたハッチからは、ソ連が開発した狙撃銃のドラグ

ノフを構えたレキがいた。

私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えないインカムからレキの詩のようなことをつぶやく声が聞こえる。

ただ目標に向かつて真つすぐ飛びだけ

レキがそのセリフを言い終わると同時に、ドラグノフが、パンパンパン！と3回銃口を光らせた。

レキが狙撃したのは——バスの下の爆弾。

バスの下から、部品^{カサブランカ}と爆弾が転がり落ちた。

——私は一発の銃弾——

再びそのセリフを言つたレキは、爆弾に向かつて発砲。

弾が当たつた爆弾は跳ねるような動きでレインボーブリッジの下、すなわち海に落ちた。

数秒後、ドーン！！という爆発音と共に巨大な水柱が上がった。

バスが停車し、俺も横に車を止めてバスの屋上に上った。

そこには、額から血を流して動かないアリアとそれを抱きかかえるキンジが豪雨に打たれていた。

アリアは直ぐに武偵病院に搬送された。

額の傷は、運が良かつたとしか言えない。

銃弾はただアリアの額を掠めただけであつて、重症では無かつた。

被弾したことによつて脳震盪を起こしていたが、MRIも撮つたが、脳出血も無く外傷だけで済んだようだつた。

翌日、キンジと共に報告書を教務科に提出し、ありつたけのももまんを手に武偵病院に向かつた。

アリアの病室は・・・予想通り、VIPの個室だな。

貴族だから当然だろ？。

中に入ると、まず小さなロビーがあつて、そこには「レキより」と書かれたカード付きの白百合^{カサブランカ}が飾つてあつた。

あの無口でロボット・レキとあだ名されているレキがあんなものを持つてくるとは、少し予想外だった。

パツチン・・・パツチン。

少し開いていたベッドルームからへんな音が聞こえる。

俺とキンジは、不審に思つて隙間から中の様子をうかがつたところ、でかいベッドに座つたアリアが・・・。

手鏡で自分の額を見ていた。

「・・・・

集中しているのか、こちらに気づく様子はない。

被弾した額には、交差するように2本の傷跡を残して、チャーミュボイントと自慢していた——キンジに聞いた——おでこを台無しにしている。

医者に聞いたのだが・・・ビリヤツてもあの傷は跡が残つてしまふらしい。

——生消えない傷が。

パツチン・・・パツチン・・・

アリアはかなり沈んだ顔で、いつも使つていた髪留めを付けては外し、付けては外しを繰り返していた。

・・・かなり気についたんだな、あのおでこ。

「アリア・・・」

その光景に耐えられなくなつた俺達は、今来たフリをしてドアにノックをした。

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさい!」

急でびっくりしたのか、何やらがせじやと慌てた音がする。

「・・・いいわよ」

アリアの許可が出たので中に入ると、アリアは額に包帯を巻きなおすしてガバメントの整備をしていた。

いらん早業だな・・・。

「・・・お見舞い?」

露骨に嫌そうな目で俺らを軽く睨んでくる。

「けが人扱いしないでよ。この程度の傷で入院なんて、医者は大げさよ」

「れっきとしたけが人だろ？その額の傷・・・・・」

キンジはアリアの額を見つめ、言葉を詰まらせる。

「傷がどうしたっていうの？何ジロジロ見てんのよ」

「その傷、跡に残るらしいな・・・・・」

申し訳なさそうな顔でキンジが言つ。

「だから何？別に気にしてないわよ？あんた達もきにしなくていい。

はい整備終わり」

そう言つてガシャン、とガバをぶつぼうな態度でサイドテープルに置くと、腕を組んだ。

「私は武偵憲章1条「仲間を信じ、仲間を助けよ」に従つただけよ」「武偵憲章だなんて・・・そんなキレイ事をバカみたいに守るなよ」「・・・・・あたしがバカだつていうの？キンジの分際で。でも、・・・・・そうね。こんなバカを助けたあたしはバカだつたのかもね」

そう言つてアリアはぷい、そっぽを向いてしまつた。

・・・・・気まずっ！

これ以上この空気に耐えられそうになかったので、アリアにももまんを渡して部屋を出た。

しばらく外で待つていると、やるせない顔のキンジが出てきた。

『・・・・帰ろうか』

こうじう時は慰めたりはせず、そつとしておいてやるのが一番なのだ。

そういう俺の気持ちを察したのか、キンジはギリギリ聞こえる声で

「ありがとう

とつぶやいた。

部屋に帰つてから、キンジはずつと何かを考えていた。

かくいう俺は、武偵殺しのことで何かが引っかつたので自室のPCで警視庁のシステムにハッキングをしていた。

そこで俺は不自然な事件データを見つけた。

その事件データとは『12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一 武偵（19）』、金一さんが死んだあの事故だった。

良く調べると、この事故は明らかに何者かの隠蔽工作によつて事故とされていることが分かった。

更に気になるのは武偵殺しによるバイクジャック、カージャックと、キンジのチャリジャックとの間の期間にこの事件が起きている、ということだ。

俺の頭に一つの結論が導き出される。

『金一さんの死は、ほぼ確実に武偵殺しに関係している・・・!』

俺はしてもたつてもいられず、すぐさま着替えて部屋を飛び出た。

アリア、キンジ、金助、そして武偵殺し。

それぞれの思いが交差する中、事件は佳境へと近づいていく・・・！

第6話～バスジャックと消えない傷～（後書き）

作者の私が言うのもなんですが、バスジャックの時に主人公いらなくね？

てことで次回はキンジ目線で物語が進行する予定です、

第7話～アリアの母～（前書き）

今日は短いです。

第7話～アリアの母～

結局、キンジはアリアと喧嘩別れをした、といつになってしまった。

アリアにしつこく付きまとわれていた頃のキンジが一番望んでいた結末。

なのに、何故かモヤモヤとしたものが心から無くならない。何とも言えないイライラした感情を引きずつたまま、週末を過ぎていた。

金助はアリアのお見舞いに行つたあの日の夜に「調べる」とあるから少しの間家を空ける」と書いて出掛けたまま、帰ってきてない。

アリアが退院する予定と聞いていた今日は、なるべくアリアの事を考えないように洗濯や掃除などの家事に没頭していた。

だが、それがいけなかつた。

昼過ぎに、アリアを見かけてしまつたのだ。
偶然クリーニング店に行って出た直後、隣の美容院から出てきたのだ。

そのあまりの変貌ぶりに、キンジはつい足を止めてしまった。
若干重い表情をしたアリアは、ツインテールはそのまま少し髪形を変えていた。

前髪を作っていたのだ。

事情を知らない人が見れば、単純に可愛いと思えたのだろうが、あれは聞くまでも無く額の傷を隠すためのものだろう。

そう思つたキンジの胸の奥にチクリとした痛みが走る。

キンジに気づかずに、アリアはモノレール駅の方へ歩き出した。
アリアの服装は、いつも見かける制服ではなく私服だった。

白地に薄いピンクの柄が入つた清楚なワンピースを着たアリアは、ファッショントークから出てきたように今風で、非常に似合つていた。

今のアリアの写真を撮つて雑誌の表紙にでもすれば、あの服は飛び
ように売れるだろう。

そうキンジに思わせるほどアリアの私服は可愛かった。

しかし、普段からアリアは身だしなみに気を使う方だったが、あそ
こまでおめかしをした姿は見たことが無かつた。

「（デートでも行くのだろうか？）」

そう考えたキンジは、ついアリアを尾けてしまつていた。

モノレールに乗り、JRで神田を経由して、新宿で降りた。
気づかれないようにある程度距離をとつて歩いていたキンジには、
すれ違う男どもがアリアをちらちら見ているのが分かつた。
あれだけの美少女が、あんなにオシャレをしているのだから無理は
ないだろう。アリアを尾けて行くと、オフィスビルくらいしかない
ビル街の方向に出た。

そのまま尾行を続けていると、アリアは予想外の建物の前で足を止
めた。

新宿警察署である。

「（オシャレした高校生が来る場所じゃないだろ）」

そんなことを考えて気を抜いていると

「・・・下つ手クソな尾行。シッポがにょろにょろ見えてるわよ

？」

アリアが振り返らず、しかし確實にキンジに向けて言った。

「なんだ、バレてたのかよ・・・質問せず武偵なら自分で調べな
さいって言つたのはお前だろ？」

てか気づいてたならなんで言わなかつたんだよ」

「迷つてたのよ。教えるべきなのかどうか。あんたも一応『武偵殺
し』の被害者の一人だから」

「何のことだ？」

「もう着いやつたし、まあ良いわ。着いてきなさい」

そう言うアリアにはいつも霸気がなかつた。

警察署に入つて行くアリアに、いくつも疑問を浮かべながら着いて行つた。

アリアが入つたのは、留置人面会室だつた。

少し待つて、アクリルの板越しに一人の監理官に連れてこられた女性に、キンジは見覚えがあつた。

アリアが普段使つているガバメントのグリップにはカメオが埋め込まれていて、それに彫られていた美人に良く似た女性だつた。柔らかな曲線を描く長い髪、オニキスのような瞳。どことなくアリアに似ていた。

「まあ・・・・アリア。この方、彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママ！」

キンジを見て少し驚いたような顔をしたこの女性が・・・アリアの母なのだろう。

かなり若いな・・・。

母親つていうより、年が離れた姉と言わされた方がしつくりくる。

「じゃあお友達かしら？ただでさえ友達を作るのが苦手だったアリアが、ねえ。ふふふ・・・」

「違うのよ。こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で、そういうのじやないわ」

そこまで否定しなくても良いだろう、ヒシリコミたかつたがここは黙つておこう。

「・・・キンジさん、初めまして。私はアリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になつてているようですね」

「あ、いえ・・・」

こんなところに居るにもかかわらず、かなえさんはその場の空気を全て柔らかく包んでくれるような感じのする人だつた。

実は、キンジはこういう人に少し弱いのだ。

柄になくどきまきして、滑舌が悪くなつてしまつ。

アリアはキンジをイラッとした目で睨んで、アクリル板のほうに身

を乗り出した。

「ママ、面会時間が3分しかないから手短に話すけど、このバカは『武偵殺し』の3人目の被害者なの。先週武偵高で自転車に爆弾をしかけられたの」

「・・・まあ・・・」

かなえさんは表情を硬くする。

「更にもう一件。一昨日はバスジャック事件が起きてる。ヤツの活動は、急激に活発になってきてるのよ。てことは、もうすぐシップも出すはずだわ。

だからあたし、狙い通りまず『武偵殺し』を捕まる。ヤツの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。

最高裁までの間に、他も絶対なんとかするから

アリアの言葉に、キンジは目を丸くした。

「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を、全員ここにぶちこんでやるわ!!」

どうやらアリアの母は、いくつもの罪を着せられていようつだった。そのままアリアとかなえさんの話は続いた。

かなえさんが管理官に連れて行かれるまで・・・

そして帰りの道で、母を想つあまりアリアが泣いたのはキンジだけが知るところとなつた。

一方その頃金助は、ある人物に電話をかけていた。

『フルルルルル・・・もしもし、父上ですか?』

第7話～アリアの母～（後書き）

早く金助パートに戻したく、ある程度割愛させて貰いました。

次回、ついに武偵殺しとの最終決戦。
そして謎の人物も登場し・・・

第8話～神殺しの力～（前書き）

今回も短めです。

第8話～神殺しの力～

俺は今、コネクター通信科で、通信科の生徒に許可を取つて通信機を一式借りて、極秘回線で電話をかける。

『プルルルルル・・・・』

俺が今電話をかけているのは、ノースカロライナ州フォート・ブルツグにある陸軍特殊作戦軍団基地にある、第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊——デルタフォースの本部の司令官室。

つまり、父の部屋だ。

「もしもし？ 誰だ？」

受話器の向こうから、低めの男の声が聞こえてくる。
間違いない。父上だ。

『もしもし、こちら毒島金助少佐です』

「おお、少佐か。少佐がこの回線を使うなんて珍しいな。何か用か？」

『はい大佐。実はお願いしたいことがあります』

「言つてみたまえ」

『現在日本に駐屯している海軍に、調べてもらいたいことがあるのです』

「……調べてもらいたいことは何かね？」

『……金一さんが亡くなられた例の事件、浦賀湾沖海難事故で沈没したアンベリール号の調査を』

「何か……あつたんだな。分かった、私にまかせたまえ。結果は明日には分かるだろ？ から明日、少佐の回線に連絡を入れる『ありがとうございます』ざいます。ではまた明日——』

俺が回線を切るうとした時、

「待ちたまえ。一つ少佐に伝えておきたいことがある」

『伝えておきたいこと？ なんですか？』

「マークしていた例の組織の者が日本に入った。十分用心してくれ

『はい。分かりました。それでは失礼します』
そう言つて俺は回線を切つた。

通信科を後にした俺は、その足で強襲科に向かつてゐた。
少し歩くと、直ぐに強襲科に到着した。

なんで休日なのに強襲科に来るのかといつと、神殺しを使った訓練をするためだ。

あの夜、鎌と名乗る男に渡されて以来毎日振つてゐるのだが、この刀が特別凄い刀だとは思えない。

切れ味や強度などは業物と呼べる代物なのだが、それだけならんなに大げさな言い方をする意味が無い。

それに白雪が、神殺しは使用者を選ぶ、と言つてゐた。

だとすれば俺は使用者として認められていないのだろう。

そんなことを考えながら中に入り、ナイフ術などを訓練する為の入形を用意した。

『そいついえばまだこの刀で森羅蒼天流を一度も使ってないな。 . . . つー!』

俺の頭に、何故俺にこの刀を渡すのかという問い合わせに對して、鎌が言つていた言葉が再生される。

君が森羅蒼天流の後継者だからわ

『そういうことか・ . . . 』

鎌の発言と、今まで何も起きなかつた事を考へると、神殺しは森羅蒼天流を運用する為に作られた刀の可能性が高い。

百聞は一見に如かず——俺は試しに森羅蒼天流の技を放つことにした。

森羅蒼天流には、元々は同じ剣術であつた森羅蒼天流と対を成す流派がある。

それが星伽に伝わる『星伽候天流』である。

星伽候天流が「剛」の剣だとすれば、森羅蒼天流は「柔」、つまり技の剣ということである。

神殺しを抜刀し、身体の左側に寝かせて構える。

力を溜め、勢いよく右回りで回転する。

1回転し終えるという瞬間、右手に持ったかなりの遠心力がかかつた神殺しを横なぎに人形に向かって振る。

『森羅蒼天流一ノ型、「真空波！」』

刀を振り切り、回転が止まつた直後、人形の腹部には鋭い斬撃の跡がついていた。

森羅蒼天流一ノ型、真空波。

この技は、素早い回転で武器に遠心力を乗せ、更に振る瞬間に手首・肘を一気に捻りながら振る。

最後の毒島家の特別な捻りにより、空気が捻じ曲げられて空氣中に一瞬だけ真空が発生し、周りの空気が一気に元の空間に戻ることにより「風の刃」が飛び、

敵を離れた距離から斬りつける技で、森羅蒼天流の奥義の元となる技だ。

だが通常の状態の俺では離れた対象に軽い傷を付けるのがやっとであつた。

なのに何故あんな跡が残つたのか。

俺は振り切つた神殺しを見る。

すると、元々は普通の刀と同じ銀色だった刀身が、黒に染まつていった。

それ以外にも不自然な点があつた。

それは、さつきより明らかに自分の体が軽く感じるのだ。

この感覚、恐らく鬼道術のそれに近いだろう。

——鬼道術とは、「超能力の」一種でバリエーションは様々。

その中に身体能力を強化する鬼道術がある。

超能力なんて言われても誰も信じないだろうが、実際超能力は存在していて、國家レベルで密かに研究・開発されている——武偵高で言えば超能力捜査研究科（SSR）- - のだ。

とはいえた超能力が誰にでも使えるわけではないし、俺も使えな

い。

なのに今、俺は確証はないが、かなりの可能性で超能力に近い能力を使用した。

もしかすると、白雪が言っていた「特別な金属」の影響なのかもしない。

だが、それを確かめる術はない。

今白雪はSSRの合宿で恐山に行っているため、聞くことが出来ないのだ。

他に事情を知つてそうな人間を考えるが誰も思い浮かばず、俺は神殺しを鞘に收め、諦めて強襲科を去つた。

部屋に戻る頃には夜になつていた。

キンジは今出かけているようで、家にはいなかつた。ソファに座り、テレビを見ながらぐうたら過ごしていると携帯に着信があつた。

携帯を開くとメールが届いており、送り主を確認するが知らないアドレスだった。

本文にはこう書かれていた。

「クラスのアイドル、りこりんだよーー?
いきなりメールしてゴメンね?」

どうしてアドレスを知つてるのは聞かないでね?

金助君にこの間の事件の関係で話したいことがあるから、明日台場

のクラブエステーラに来てね」

どうやら送り主は同じクラスの峰理子のようだ。

理子とはクラスである程度話した程度で、そこまでは仲良くない。

だが、彼女は探偵科のAランクで情報収集能力が普通の生徒のそれを大きく上回るらしい。

更に彼女は武僧殺し事件の調査をしている。

今はとにかく何でもいいから情報が欲しかったので、「分かった

とだけ返信した。

第9話～理子の誘惑と待ち伏せ～

翌日、俺は強襲科のノルマを速攻でこなして会場のクラブ・エステー
ラに来ていた。

中に入り、理子を探していると奥の方から理子が駆け寄って来た。

「あ、キーくんMk?～～!～!」

「・・・はい？」

「あの・・理子さん今なんて?」

「ん?どうしたのMk?～?」

「俺はガン ムか!～!」

「まあまあ細かいことは気にしない」

そう言つて理子は俺を個室に引きずりこんだ。

「で、何が分かつたんだ?」

ソファに座りながら問う。

「可能性事件、って知ってる? 事故つてことになつてるけど、實際は武偵殺しの仕業で隠蔽工作されて分からなくなつてるだけかもしれないヤツ」

「それはもしかして、浦賀沖海難事故のことかな?」

理子は俺の発言に目を丸くした。

「・・・どうして分かつたの?」

「あのデータを調べたら明らかに隠蔽工作がされていたからな」

更に目を丸くした理子は、小声で

「I l n - y a p a s i n s o u c i a n c e (油断なら

ないわね)」

とフランス語でつぶやいた。

対して俺は

「Q u e . . e s t - c e q u e c - e s t ? (何がだ?)」

と”フランス語”で答えた。

「な・・・何でフランス語が話せるの・・・?」

理子は俺がフランス語をしゃべったことに驚きを隠せない様子。

「デルタフォースの兵士は、他の国の部隊と作戦を合わせる時にスマーズにコミュニケーションをとるために、演習の時に一般の兵士に作戦を知られないために色々な言葉を話すのや。ちなみに俺は6か7力国語くらい喋れる」

口を開いたまま理子が固まつたので、俺は席を立つた。

「情報がそれだけなら俺は帰らせて貰うよ。今日は予定が詰まつてるんでね」

そう言つて立ち去るうとした時

「ま、待つて……」

後ろから理子が抱きついてきた。

「・・・まだ何かあるのか？」

俺が振りかえると、身長差のせいで上田使いで理子が小さい声でこう言つた。

「せっかく高っかい個室とつたんだし、理子と“いいこと”しよ？」
理子は俺をソファに座らせ、押し倒そつと寄りかかつて体重をかけてくる。

「この部屋の事は誰にもバレないよ？だから、理子と一緒に・・・しよ？」

理子は俺の耳の側で語りかけてくる。

それに対しても俺は・・・

「悪いが断る。俺はそういうのには興味はないし、それに理子。君にはその気はないのだろう？」

予定が詰まつているから俺はこれで

驚き以外の感情がないといふほど顔を強張らせた理子を放置し、俺は部屋に戻つた。

「アンベリール号の調査に向かつた潜水艦が、何者かによる攻撃を受けて動けなくなつた」

部屋に帰つて来た俺に、海底調査の結果が言い渡された。

「・・・現在その潜水艦はどうなつてているのですか?」

「スクリューを少し破壊されて移動が出来ない状態だ。現在も状態は変わらない」

「そうですか、ありがとうございました。では俺はこれで「・・・無茶だけはするなよ?金助」

回線を切る直前に、「名前」で金正が忠告した。

俺は、通信を終えた後直ぐにバイクを浦賀に向けて走らせた。嫌な予感がする・・・!

バイクの速度計は、時速140キロを超えていた。

アンベリール号が沈没したところに一番近い港に着くと、そこには10人ほどの黒装束の武装した集団が固まっていた。

「来たか・・・」

黒装束の一人である男が、一步前に出てしゃべりかけてきた。

「待ち伏せかよ・・・潜水艦を攻撃して注目をひいておびき寄せたのか・・・」

「(名答) そういうわけで貴様には大人しくして貰おうか。「久美」ちゃんが待ってるよ?」

男が右手を上げると、他の黒装束が囲んできた。

「そうか・・・貴様らが久美を・・・」

俺は神殺しを抜刀した。

黒装束の奴らが武器を構えて一斉に飛びかかってくる。

俺はそれを、全て同時にはじき返した。

「お前ら、その名を口にして無事に帰れると思うなよ・・・!」

俺の髪は激しく逆立っていた。

第9話～理子の誘惑と待ち伏せ～（後書き）

感想お待ちしてます

第10話～12年前の悲劇と怒りのヒストリックモード（前書き）

指摘を受けたため、金助君の『』を普通にしてよいと思います。

第10話／12年前の悲劇と怒りのヒステリアモード／

12年前——俺が4歳の時、毎日父による兵士になるための特訓を受けていて、時間が無かつたのと、親が軍人で近寄りがたかつたという理由で同年代の友達が全く居なかつた。

その頃、俺は訓練が終わつた後遊ぶ友達が居なくて一人で自主練ばかりしていた。

そんなある日、家のすぐ近くに日本人の家族が引っ越してきた。

その家族の名字は神祓。

構成は、父・母・兄・妹というもので、妹の方が俺と同じ年で、兄が2つ年上だつた。

異国之地で日本人同士ということ、子供の年が同じということもあり、家同士すぐに仲良くなつた。

神祓家の子供の名前は、兄が明久、妹が久美であつた。

久美が引っ越してきて以来、俺の訓練が終わる時間に久美と明久が俺の家に来て、それからご飯の時間まで一緒に遊んでいた。

1か月が経つた頃には俺たちはかなり仲良くなつていて、特に俺と久美はもはや双子のように仲良くなつていた。

そういうして1年がたつたある日、悲劇は起きた。

食事に招待されて神祓家に家族全員で向かうと、久美たちの両親が血にまみれて倒れていたのだ。

そしてその横に立つっていたのが、血に濡れた真っ赤な刀身の刀を持つて、気絶した久美を抱えた明久だつた。

父が近づこうとすると、窓からナイフを持った黒装束の男が数人飛びこんできていかかってきた為、父と母が応戦した。

「これは明久さんがやつたんですか・・・？」

俺は明久に近づきながら問いかけた。

すると明久が冷めきつた声でこう答えた。

「そうだ・・・だが、仕方が無い事だった」

「どんな理由があつても人を殺していい訳がない！！」

明久の言葉にキレて、俺は全力で怒鳴りつける。

「久美を利用する為に『イ・ウー』に連れていくと言つたら止めようとしてきたんだ。俺は悪くない」

俺が怒鳴りつけても明久の冷たい口調は変わらず、それどころか久美を抱えたまま俺の横を素通りして立ち去ろうとした。

「待てっ！！」

そう叫んで俺明久の肩を掴んで止めよつとした。

その瞬間、明久の表情が一変し、

「俺の邪魔をするな！！」

久美を床に置いて・・・俺を斬りつけた。

「ぐあああああ！！」

5歳の俺に当然その斬撃をよけることが出来ず、薄れゆく意識の中、立ち去りながら明久がつぶやいた言葉を聞いた。

「貴様も連れて行こうと思つてたが、弱すぎるな。もう一度と会うことはあるまい」

それを聞いた直後に俺は意識を失った。

その後俺は久美の両親と共に敵を排除した父と母に病院に搬送された。

俺はなんとか一命を取り留めたが、傷が深かつた久美の両親は医者の懸命な手術もかなわず無くなってしまった。

その事件の後、俺はイ・ウーという組織を追い始めた。

「な・・・貴様の戦闘能力は大したこと無かったはず・・・！！」

最初に話しかけてきた集団のリーダーらしき男が、顔を歪めながら言った。

男の眼には、倒れた部下とその上に立つ髪を逆立たせ、鬼神のよう

な威圧感を纏つた金助が映っていた。

「俺を怒らせるからこうなるんだよ」

一瞬で立ち尽くす男に肉薄し、何も持っていない右手で男の額に掌底を叩き込んで脳を揺さぶり、気絶させた。

——ヒステリア・リベンジ。

通常のヒステリア・ノルマーレのように性的興奮ではなく、怒りによって発現する俺にだけ現れたヒステリアモード。

通常のノルマーレは女を守るヒステリアモードだが、リベンジはその名の通り女を傷つけられた時に復讐をするヒステリアモードであるのだ。

このモードになると、某バトル漫画のキャラクターのように髪が逆立つのだ。

そしてそれと同時に、神殺しの能力による身体強化を併用していた。「雑魚の癖に俺に挑んでくるなんてな。俺に挑むならもつと強いやつを連れてこい」

そう意識のない男に言い放つて沖の方を向こうとした瞬間、背後から殺氣を感じ、神殺しを抜きながら振り向く。

そこには、黒のズボンと赤いコートを着た男が真っ赤な日本刀の峰を肩に乗せて持つて立っていた。

「久しぶりだな、金助」

そう俺に声をかけてきた男は——明久だった。

「明久……！」

溢れんばかりの殺氣を抑え、神殺しを八相で構える。

「おいおい久々の再会なのに物騒だな。気楽にやろうぜ？」

そういう明久からは、鋭い者でなければ気づけないほどの抑え込まれた殺気が放たれていた。

「ならまず殺氣を抑えてから言つんだな。説得力が無さ過ぎるぞ」何をしてくるか分からない相手なので、喋りながらも最大限に警戒する。

ヒステリアモードの目で、かすかな指の動きや呼吸ですらも警戒の

対象である。

「なんだ、バレてたのか。なら遠慮はいらないな」

そう言つた直後、明久から物凄い殺氣が溢れ出た。

常人なら腰を抜かすほど、殺気が。

一触即発、そういう雰囲気の中で俺はどうしても聞きたい事を聞くことにした。

「・・・一つだけ聞かせろ。久美にあの後何をした」

その質問に對して、明久は素っ気なくこう答えた。

「俺の妹なんだから何しても関係ないだろ?」

明久がそう答えた瞬間、俺は地面を蹴った。

数メートル程距離は離れていたが、一瞬で間合いを詰めて全力で袈裟切りを放つ。

明久は、それを顔色一つ変えずに赤い日本刀で防ぐ。

「12年前と比べると驚くほど力を付けたな。称賛に値するぞ」

鍔迫り合いの中、明久は余裕たっぷりな声でそう言つた。

「それはどう・・・もつ!!」

強化された身体能力で赤い刀を押し切り、低く回転しながら軸足を刈り取るとするが明久は片手のバック転で回避し、身体の右下で刀の先端を下にして構えた。

俺もバックステップで距離を取り、神殺しを左手に持ち替えて脇のホルスターからSOCOMを取り出し、片手で明久に3発撃つた。しかし明久は全て身体を逸らしてかわし、どこからかチャクラムを取り出して投擲してきた。

SOCOMで正確に射撃してチャクラムを撃ち落とした俺は、SOCOMをしまい、胸ポケットから遮光バイザーを取り出して装着、腰の後ろにつけていたスタングレネードを右手で持つてピンを抜き、明久の前に投げてから素早く距離を詰める為に走り出す。

明久は腕で顔を隠す——ということはせず、チャクラムをスタングレネードに投げて破壊した。

それを見てすぐに足を止め、神殺しを身体の左に寝かせて構える。

森羅蒼天流一ノ型、真空波。

ヒステリアモードの反射神経を使って放てば、どれほどの威力が出来るのかは想像できない。

だが、隙のない明久にむやみやたらと突っ込むよりはマシなはずだ。力を溜めて、物凄い速度で回転を開始する。

遠心力を乗せた神殺しを右手の全神経を瞬間的にフル稼働させ、一気に肘から手首を捻つて振り切る。

「森羅蒼天流一ノ型、真空波！」

技の名を叫んだ瞬間、真空によって生まれた見えない斬撃が明久の腕に当たり、防刃服を斬り裂き明久の腕から鮮血が飛び散った。

「！？」

明久は痛みに顔を歪ませながら、今何が起きたのかを理解しようとしている。

「この12年で俺は力を蓄え続けた。だが、お前はそれを怠った。それがお前の敗因だ！」

右手に握るSOCOMの銃口を明久に向ける。その瞬間、明久は今いた場所から姿を消した。そしてそのことに気付いた時には明久は俺の真後ろに居た。明久が俺に向けて刀を振りおろした。

俺は気配を察知してすぐに横に跳んで避けた。そして立ち上がりながら明久を見た俺は、言葉を失った。

俺が驚いたのは、明久の外観。

明らかにさつきには無かつたものがある。

明久の身体がドス黒い光を覆っていた。

第10話～12年前の悲劇と怒りのヒステリアモード～（後書き）

金助君が遂にヒスリましたね～

第11話 決着と代替着陸

明久がいきなりドス黒い光を纏つたことに警戒し、俺は神殺しを八相で構える。

明久は赤い日本刀を片手で体の右側に構え、その構えのまま爆発的な速度で接近してきた。

狙いは明らかに突きだ。

明久は体の捻りを開放して鋭い突きを繰り出してくる。

俺も神殺しを右手に持ち、右足で思いつきり踏み込んで刀を疾風の如く突き出した。

「森羅蒼天流二ノ型、疾風突き！！」

突きがお互いに当たる！

という瞬間、突然何者かが俺達の間に割つて入り、両方の刀を掴んで止めた。

驚きながらも俺達の刀を止めた奴を見ると、ピッタリ張り付く黒いレザースーツで全身を覆い、顔にはヘルメットをかぶつ正在確認できない。

胸に膨らみがあるところを見ると女だということが分かった。

「悪いけどここまでよ。引き上げるわよ、明久」

若干低めの声で謎の女が明久の方を見て言う。

どうやらこの女は明久の仲間らしい。

明久がそう言わると、纏つっていた黒い光が消えた。

「もう時間か・・・」

そう言いながら明久は俺を睨みつける。

「そもそも目的は時間稼ぎでしょ？ 目的が達成されたんだからさっさと行くわよ」

女はそう言って掴んでいた刀を離し、姿を消した。

「今回は邪魔が入ったが、次は会った時に今ままだつたらお前は間違なく死ぬ。それを覚えておけ」

そう俺に一瞥しながら言つて、明久も姿を消した。

「・・・・・」

俺は未だに状況を理解できず、呆然と立ち尽くしていた。

すると突然、携帯が小刻みに揺れ始めた。

我に返つた俺は、携帯を開いて耳に当てる。

「金助！…今どこにいる！？」

いきなり携帯からバカでかい声が聞こえる。

電話の相手は、クラスメイトで車輶科の武藤剛氣ロジ。

ランクはAで乗り物と名のつくものなら何でも運転できる乗り物才

タクならしい。

「武藤か。今は浦賀だが、どうしたんだ？」

ヒステリアモードが続いていた為、落ち着いて状況を確認する。しかし武藤から帰つて来た答えは予想外のものだった。

「アリアが乗つた飛行機がハイジャックされた！」

「ハイジャック・・・・だと・・・・！？」

アリアが飛行機に乗つていたことは一旦置いておこう。

だが、偶然アリアが乗つた飛行機がハイジャックされたとは考えにくい。

そう考えた瞬間、ヒステリアモードの頭が答えを導く。

このハイジャックは恐らくーーいや、ほぼ100%『武偵殺し』の仕業だ。

『武偵殺し』の最初の犯行はバイクジャックで、次がカージャック。仮に浦賀沖海難事故が『武偵殺し』の仕業だとしよう。

すると、次の犯行がキンジのチャリジャックとここでいきなり乗り物が小さくなる。

次にバスジャック、そして、ハイジャック。

浦賀沖海難事故で金一さんは乗客を避難させて死んだと言われているが、俺の仮説が正しければ金一さんは、浦賀沖海難事故ーーシー ジャックで『武偵殺し』と直接対峙して、殺された。

3回目の事件で『武偵殺し』は金一さんを倒した。

しかしその次でいきなり乗り物が小さくなり、また少しづつでかくなっていく。

恐らく武偵殺しは、3回目のハイジャックでアリアを・・・殺すつもりだ。

その考えにたどりついた瞬間、俺は止めてあつたバイクにまたがつて、いつでも出られるようにした。

「金助、お前とキンジ以外の奴は教室に全員集まっている。来れるか？」

キンジが居ないという事は、恐らくキンジもアリアと同じ飛行機に乗っているだろう。

「すぐに行く！全速力でとばせば30分くらいで着くからそれまで待つてろ！」

そう言って電話を切り、フルスロットルで発車させた。

30分後、俺は武偵高の一般校区の前にバイクを止めて、2-A教室にに入った。

中では武藤が何やら電話に怒鳴っている。

俺は武藤に近づいて声をかけた。

「武藤、状況はどうなっている？」

声をかけられてやっと俺に気づいたらしい武藤は、電話を俺に差し出しながらこう言った。

「飛行機に何故かキンジが乗つててな、ハイジャック犯を撃退したらしくんだが、その後にミサイルで燃料系の門を兼ねているエンジン2機を破壊され、盛大に燃料漏れをしている。

燃料の都合上、羽田しか着陸できる場所が他にないから羽田に向かわせようとしたんだが、防衛省のクソ共が羽田を封鎖しやがったんだ・・・・！」

こみ上げる怒りを必死に抑えながら武藤は状況を整理して説明してくれた。

俺は電話を受け取り、耳に当てる。

「キンジ、聞こえるか？俺だ」

「金助か。状況は今武藤が説明したとおりだ。まんまとしてやられたぜ」

落ち着いた口調でキンジが返事を返していく。

口調から察するにどうやらヒステリアモードになつてているみたいだ。

「どうやつになつたのかは聞かないでやるよ。それより今どこを飛んでいる？」

「今は東京湾をぐるぐる回つてゐる。着陸できるといふ所を探して

るんだが、思いつかなくてな」

キンジはどうやら代替着陸の場所を探しているらしい。

「・・・ちょっと待つてろ、キンジ。レキ、学園島の風速は分かるか？」

少し考えて、一筋の希望を見出した俺は、窓から先程降り始めた雨が降る外を見ているレキに話しかけた。

「――私の体感では、5分前に南南東の風、風速4102mです」

レキは淡々と答えを返していく。

「じゃあ武藤、風速41mに向かつて着陸すると滑走距離はどれくらいになる？」

次は横で俺とキンジの話を聞いていた武藤だ。

「・・・まあ2050ってところだ」「

流石は乗り物オタク。こういう計算は速い。

――そして条件はクリアされた。

「キンジ、今のお前なら俺が何を考えているのか解るはずだ」

俺は繋がつたままの電話の向こうのキンジに考え方悟らせる。

「ああ。空き地島だな？」

そう答えるキンジの声は、希望が見えたからか、心なしかテンションが高くなっている。

俺の横で会話を聞いていた武藤が絶句する。

「正解だ。だがそこには誘導灯すらない。どれだけのベテランパイロットだろうと誘導灯が無いと着陸はできない。それでもお前

はやるか?」

俺はキンジを試す意味で問うた。

当然キンジは、

「当たり前だ。何としてでもやつてみせる

そうハツキリと答えた。

「良く言ったキンジ。幸運を祈っているぞ!」

そう言って俺は電話を切った。

振り向くと、教室内の同級生全員が俺に注目していた。

「皆、よく聞いてくれ。キンジ達が乗っている飛行機は、これから空き地島に着陸する。

だがあそこには誘導灯がない。さて、どうする武藤?

俺は横で苦虫を噛んだよつの顔の武藤に話を振る。

「お前らは良くそんな事が思いつくな・・・。誘導灯が無いなら、作ればいい!

皆!今から装備科で懐中電灯をありつたけ持つて、空き地島に行くぞ!-足は俺が確保する!-!

そう言って武藤は俺の方を向く。

武藤を横目で軽く見て、皆に向き直る。

「」の中にはバスジャックでキンジ達に助けてもらつた奴らが大勢いる。

その恩義に報いる時が来た。皆!絶対に飛行機を着陸させるぞ!-

!」

俺の声を合図に、2-A教室の生徒全員が雄たけびをあげながら装備科へとかけて行つた。

「金助!俺達は足を確保するぞ!-!

そう言って武藤と俺は車両科のドッグへと向かつた。

第11話～決着と代替着陸～（後書き）

次回、武偵殺し編完結です。

ちなみに武偵殺し編が終わったらオリジナルストーリーをやひとつ
思っています。

とことことで感想をお待ちしています

第1-2話／決死の着陸とアリアの告白

金助との電話を終え、キンジは時計をチララッと見た。

——燃料切れまで、後3分。

機内放送用のマイクを取り、キンジは「」と言った。

「皆様、当機はこれより——緊急着陸を行います」

AMA 600便は、東京湾のレインボーブリッジの手前の方を飛んでいた。

そろそろ人工島が見えてもいいはずだ。

キンジは、本来なら人工島がある場所を見た。

——だが、人工島は見えない。

着陸は——不可能だ・

元々分かってはいたが、ここまで見えないとは……。

金助が言ったように、どれだけベテランのパイロットであろうとも事故は免れないだろう。

・・・では、どう被害が少なくなるように墜落させるかだ。

そうキンジが考えた瞬間、

「キンジ。 大丈夫。 あんたになら出来る。 出来なきゃいけないのよ」

横のアリアがキンジにそう言った。

「あんた、武偵をやめたいんでしょ？ なら武偵のまま死んだら負けよ。

それに——あたしだって、まだ・・・ママを助けてない！

あたしたちは、まだ死ねないのよ……！」

アリアがさらに言葉を続ける。

そして前に向き直り

「こんなところで死ぬわけがないわ……！」

——と言い切つたその直後だつた。

何も見えなかつた暗い海に、突然小さな点でできた長方形の光が見えた。

長方形の右手前では、点どころでない、目を覆いたくなるほどの光が続けざまに起こつていていた。

おかげでその周辺が鮮明に見える。

いきなりの出来事にキンジが焦つていたら、先程金助と通話した衛星電話に電話がかかつて来た。

電話に出ると、

「キンジ！ 見えてるかバカ野郎！」

と親友の怒鳴り声が聞こえてきた。

「武藤！？」

キンジが驚いた声で「この光は何なんだ？」という意味を含めて声の主の名を呼ぶと、武藤は

「お前が死ぬと、白ゆ・・・いや、無く人がいるからよオー！オレ、^{ロジ}車輛科で一番でかいモーター^{ロジ}ボートをパクッちまつたんだぞ！」
半ばやけくそ氣味な声で叫んだ。

それに続いて電話機から別の人物の声が聞こえてきた。

「キンジ！俺のスタングレネードの光見えてるか！？ 持つてる分全部持つてきて今回だけで使い果たしそうなんだぞこの野郎！早く着陸しやがれ！」

それに装備科の懷中電灯も無断で持つてきただ！後で全員分の反省文お前一人で書けよ！」

金助だ。

ということは、あの強い光は一つのスタングレネードのようだ。
返答をする間もなく、更に次々と別の人物の声が聞こえた。

「キンジ！機体が見えてるぞ！」

「あと少しだ！」

「もう少し頑張りやがれ！」

——の声、こいつら俺とアリアと金助でバスジャックから助けた

奴らじやないか！

同級生達の激励の言葉を受け、キンジの飛行機がスタングレネードが爆発している所に着いた。

武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。

着地と同時に、アリアが残つたエンジンから逆噴射をかける。

「止まれ・・止まれ止まれ止まれえーーっ！！！」

もう少しで吹つ飛びそうな衝撃の中アリアが叫ぶ。

そんな甲高いアニメ声に合わせて

「行くぞ！！」

キンジは地上滑走用のステアリングホイルを操作し、機体をカーブさせた。

武藤の言つた通り、2050mでは止まり切らない。

それはキンジにも分かつていた。

だが、キンジはそのつもりで人工島に突っ込んでいた。

——見えてきた。

風力発電の、風車の柱が！

飛行機の右翼が柱にぶつかり、風車を折り曲げながら機体は柱を軸にぐるりと回る。

着地の時よりも激しい衝撃が飛行機に走った。

キンジとアリアは、操縦席でもみくちゃに跳ねまわつて——

「・・・止まつた」

金助の横に居た武藤の口から安堵がこぼれる。

それを合図に、その場にいた全員が歓声を上げる。

俺も声をあげそうになりながらも、今は浮かれている場合ではないと判断し、気持ちを切り替えて皆に声をかけた。

「皆！今は乗客の救助が最優先だ！時間を無駄にするな！」

俺の声に触発された皆は、即座に飛行機にかけて行った。

そこは流石、仮にも武僧なだけはある。

そんなことを考えながら、俺は武藤と操縦席の真上に登つて、小さいハッチを開けて中を覗き込む。

中では椅子に座るキンジに、アリアが抱きつくような姿勢で乗つかつていて、俺たちに気付いたキンジは苦笑いを浮かべながらも指を一本立ててピースしてきた。

その後、キンジとアリアは病院に運ばれた。

——余談だが、俺は事件の報告書をキンジの代わりに纏めようとして、キンジの病室で書類に手を付けたのだが……。明久との戦いで神殺しの身体強化、今の肉体の限界を超えた真空波、そしてヒステリア・リベンジの長時間使用という無茶のダメージが後から来てしまい、その場で倒れ、俺も同様に入院することとなってしまった。

数日経ち、俺とキンジとアリアは退院——俺は一日遅れて——して部屋に戻っていた。

部屋に戻った直後、俺はアリアから予想外の告白を受けた。
「金助、あたしね……ロンドンに帰ることになつたの……」

第1-2話～決死の着陸とアリアの告白～（後書き）

なんかパツとしない終わり方だったな・・・

てことで次回、武偵殺し編完結です。

感想、お待ちしていまーす

第1-3話～終わりと始まり～（前書き）

時間の都合上、一日空けてしまいました・・・
すいませんでした！！

第13話／終わりと始まり

突然のアリアの告白に、俺は驚きを隠せなかつた。

「あたし、やつぱりパートナー探しに行くわ。ホントはあんた達だつたら良かつたんだけど、でも・・・約束だから」

約束、恐らく一件だけ事件を一緒に解決するつていう約束だろう。

「武偵憲章2条。」依頼人との契約は絶対守れ”。だからもう金助、あんたを追わない」

実際はアリアは俺よりキンジに熱心ーアリアにヒステリアモードを見られていないので当然と言えば当然だーだったから、追われた記憶がほとんどないのだが、流石にそれを言うのは自重する。

「結局あんたの実力は分からなかつたけど、あたし達がハイジャックされてた時にあんたはテロリスト集団を捕まえてたんでしょ？」アリアが言つて言るのは、浦賀港での戦闘だ。

明久と謎の女は、部下であろう黒装束の集団を置いて消えたため、移動中のバイクで警察ー知り合いの信用できる刑事ーに通報して逮捕して貰つたのだ。

そのときにテロリストということにしたらしく。

「まあな。だが大したことじゃない」

実際に大したや相手じやなかつたので、正直にアリアに返答した。大変だつたのは明久との戦闘の方だ。

「そう？・・・まあそういう謙虚なところを含めて、あんたは一流の武偵よ」

「よせよ。俺は一流なんかじゃないぞ」

アリアの言葉に、まんざらでもない顔で答える。

「私の中じや、あんたは一流よ。思い返してみると、あんたと組んだのはバスジャックの時だけよね・・・。

あんたは実力を見せなかつたけど、上手くあたしに合わせてくれて

たのは分かった。

だから・・・もし良かつたら、もう一度会いに来て。その時は今度こそ、パートナーに・・・

ベランダから星空を眺めながらそぞつ言つてくるアリアは、なんだか無理しているように見えた。

「・・・考えとくよ。それよりロンドンにはいつ帰るんだ?」

アリアの頼みを軽くあしらって、俺は話題を変えた。

そんな俺の問いに対し、アリアは少しためらいながらも

「・・・今日よ。もうすぐにでもここを出て、女子寮の屋上にヘリがあるからそれに乗つて、イギリス海軍の空母まで行って、そこから艦載ジェット機でぴょんよ

・・・スケールがでかい。

流石は貴族様だな。

「そうか・・・名残惜しいが、これでお別れだな。 短い間だったが、楽しかったぞ」

そう言いながら俺はアリアに右手を差し出す。

「あたしもよ。 キンジも、ありがとうね・・・」

アリアは俺と握手をした後、俺の横に居たキンジに手を出した。

「あ、ああ

キンジは歯切れの悪い返事をしながら握手をした。

「・・・それじゃああたし、もう行くね」

「見つかるといいな、パートナー」

少し穏やかな表情を作りながらキンジが言う。

「きつと見つかるわ。あんたのおかげで世界のどこにもいない訳じやない事がわかつたから」

「そうか、がんばれよ」

「達者でな」

俺とキンジが続けざまに言つと、アリアはドアを開けながら

「うん。バイバイ」

そう言つてあっさり出て行つた。

俺は振り向いて玄関を去ろうとしたが、キンジはその場に立ちはぐくしていった。

理由は明白だ。

出て行ったはずの、アリアの足音が全く聞こえないのだ。キンジはのぞき穴でドアの外を見ようとしていた。

「別に止めないが、見ない方が良いぞ」

そう言って俺はリビングに戻った。

俺がキンジにああ言った理由、それはーーアリアがドアの前で泣いていたからだ。

何故泣いているのかと言われば、答えは当然キンジをパートナーに出来なかつたから、だ。

俺が帰つてくる前、キンジは俺とアリアがさつきしたのとあまり変わらない会話をしたらしい。

そこでキンジはアリアのもし良かつたらパートナーとして会いに来て、という申し出を断つている。

結局キンジは、俺の警告を無視してのぞき穴で泣いているアリアを見てしまつた。

アリアがこの部屋を出て行つてから30分が経つた。
キンジはこの30分間、ずっと頭を抱えて思いつめた表情をしていた。

俺はその横で呑気にコーヒーを飲んでいた。

すると、急にキンジが頭をあげて、俺を見て、いつ言つた。

「なあ金助。俺は遠山の欠陥品、だよな？」

「そうだな」

俺はキンジの自虐的な発言を、否定ではなく肯定した。
欠陥品というのは、ヒステリアモードを上手く扱えないということだろう。

それは俺も同じだから、あえて肯定したのだ。

「でも、俺はあいつの味方ぐらいには、なれるかもしない」

キンジの言葉には、一種の覚悟が含まれていた。

「それで、結局どうしたいんだ？」

キンジが何を言いたいのかは分かっている。

だが、俺はあえてキンジにそう問い合わせた。

「アリアはずっと一人で戦ってきた。これからもそれは変わらないだろう。あいつは強い。だけど、やっぱりどこまで行つても独りなんだ」

自分に言い聞かせるように、キンジがそう言つ。

「男なら言葉にするより行動をしろ。早くしないと一生後悔することになるぞ？」

そう言つて、コーヒーに口をつけた。

「サンキュー金助。行つてくる！」

キンジはそう言い残し、部屋から出て行つた。

どこへ？とは聞かない。

俺はカップの中のコーヒーを飲み干し、テーブルに置いてから椅子から立ち上がつた。

そして、キッチンへ向かい、冷蔵庫の中身を見て今日の晩御飯を考える。

キンジはアリアを連れて帰つてくれるだろ？

根拠はない。

だが、なんとなくそんな気がする。

ありつたけの食材を使って、豪華な料理を作ろ？

今日は俺達パーティーの再結成日になるだろ？から。

第1-3話～終わりと始まり～（後書き）

これで武偵殺し編、完結です！

次回はオリジナルストーリーをやるので、少し口を空けるかもしれませんので、ご了承ください。

とこりことで、感想お待ちしております。

現時点での主人公のプロフィール（前書き）

すいません、テストが近くなったため次話を考える時間が少なくて遅れています。
てことで場つなぎです。

現時点での主人公のプロフィール

名前：毒島金助
ぶすじまきんすけ

性別：男

身長：185cm

体重：74kg

誕生日：4月5日

血液型：O型

武器：神殺し（刀）・青龍円月刀・SOCOM×2・M4A1・軍支給のベレッタ・コンバットナイフ×2・スタングレード
武僧ランク：アサルト強襲科A・レザード諜報科S

容姿：少し短めのとがった黒髪に、不知火に勝るとも劣らない整つた容姿。

引き締まりつつもがっしりとした体だが、長身の為あまり目立たない。

アメリカの武僧高ではかなりモテた。

所属：米陸軍第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊・東京武僧高強襲科
デルタフォース

家族構成：父（金正）・母・息子（金助）

概要：遠山家（父）と毒島家（母）の間にアメリカで生まれ、幼少期から軍人の父に戦闘や潜入などの英才教育を受けていた。

5歳の頃に久美を明久に連れ去られたのをきっかけに、母から毒島家に伝わる森羅蒼天流の訓練を受け始める。

中学から武僧高付属中の諜報科に通い、インターとして14歳のときにニューヨーク武僧高に入る。

そして14歳で特例としてデルタフォースに入隊、数々の潜入作戦を成功させて少佐の地位に登りついた。

初対面の人間には紳士的に接するが、少し仲のいい相手になると砕けた喋り方になる。

ハツキングもかなり得意で、情報科にスカウトされたこともある。^{インフォルマ}

容姿が良く、礼儀正しいためかなりモテる。料理がそこそこできる。

以上です。

現時点での主人公のプロフィール（後書き）

オリジナルストーリーはまだ今執筆中です。
すぐに上げられるように頑張りますのでお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1430y/>

緋弾のアリア～神殺し伝説～

2011年11月21日13時38分発行